特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡

1995

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

第90次調査　西山光照寺門跡

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡

1995

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

序　文

一乗谷朝倉遺跡は、平成６年度に町並立体復原事業が終了し、環境整備の重要なポイントが一つ完成しました。

平成７年度の発掘調査は、前年に引き続き西山光照寺では山裾部分を発掘しました。前年度に墓地が見つかっているので、更に新たなものを期待しましたが、発見出来ませんでした。もともと天台宗の寺院跡で、多数の大型石仏群が並んでおり、石垣や正面に階段なども見つかっていますが、階段は一乗谷滅亡後、光照寺が再興された時に盛土をして１～２段つけ加えられているようです。

門の近くには自然石で真盛上人、盛舜上人の供養碑が立っています。遺物の数はあまり多くなく、基本的には従来の遺跡からのものとほぼ同じで、越前焼、土師質皿、瀬戸や美濃、輸入物としては、青磁、白磁、染付などです。この寺は近代まで庵が存在していたので、近世から近代にかけての遺物も発見されました。

御所・安養寺は将軍義昭が一時滞在したところで、昭和45年に一部が調査されているので、建物跡も確定したものは発見されず、出土遺物も比較的少なかったようです。

その他個人用地の現状変更にかかわる事前調査や、朝倉館前の一乗谷川の河川改修に伴う事前調査として、当時の護岸の有無の確認調査を行いました。

環境整備事業は、平成４・５年度に発掘調査を実施した武家屋敷跡を中心として保存整備工事を行いました。これにより、地区全体約25,000㎡の整備が終了しました。

最後になりましたが、事業の実施にあたって文化庁をはじめ、関係各位の皆様、地元の方々には大変お世話になりました。心から厚くお礼もうしあげます。

平成８年３月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料
館長　貴　志　真　人

例　　言

1．本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成７年度に実施した国庫補助事業の発掘調査の概要報告である。

2．平成７年度は発掘調査中期10カ年計画の第９年目にあたる。本書には、第90次調査、第91次調査、第92次調査、第93次調査の概要を収録した。

3．遺構平面図作成にあたっては、国土座標第VIをもとに、朝倉氏遺跡内に設置した基準点を用いた。

4．本書の作成にあたっては、館長貴志真人の指導のもとに館員全員が討議・検討を行なった。執筆は調査担当者がそれぞれ分担し、文末に文責を記した。なお、編集は岩田隆が担当した。

目　　次

巻首図版

序文

例言

目次

Ⅰ．平成７年度の調査概要 …… 1

II．第90次調査

遺構 …… 4

遺物 …… 9

石仏 …… 20

III　第91次調査

遺構 …… 25

IV　第92次調査

遺構 …… 26

遺物 …… 29

V　第93次調査

遺構 …… 31

遺物 …… 31

VI環境整備 …… 33

Ⅰ．平成７年度の調査概要

本年度は、「発掘調査・環境整備事業中期10カ年計画」の第９年次として、福井市安波賀中島町地係の西山光照寺跡約800m²（90次調査）および福井市東新町安如寺地係の約2,600m²（91次調査）について実施した。第90次調査については、平成６年度の発掘調査の際山裾に墓地らしき部分が確認されたのでその広がりを確認するためと、西山光照寺の門の調査を行なった。墓地は平成６年度の分のみで、山裾まで広がっていないことが確認された。門については石の階段が確認された。調査期間は４月１日～７月18日までである。

第91次調査地区は「御所・安養寺」と連称され、後に室町幕府の第15代将軍となった足利義秋が逗留していたと伝えられるところてある。山裾側については、しっかりした礎石が並んでいたが、調査地区の西寄りは、後世の削平によって遺構の残存状態が良くなかった。調査期間は７月19日～12月26日までである。

８月23日～９月８日までと９月18日～10月４日迄は、城戸ノ内町の斉藤宅（92次調査）と石田宅の家屋改築（93次調査）による現状変更申請に伴う事前調査を行なった。92次調査地区は近世もしくは近代にかかる桶の便所跡が見つかり、その下層から朝倉時代の遺構面を確認したが、明確な遺構そのものは見つからなかった。93次調査地区は59次調査地区の北に隣接しており、石組遺構が１基だけ見つかっただけで外に遺構はなかった。

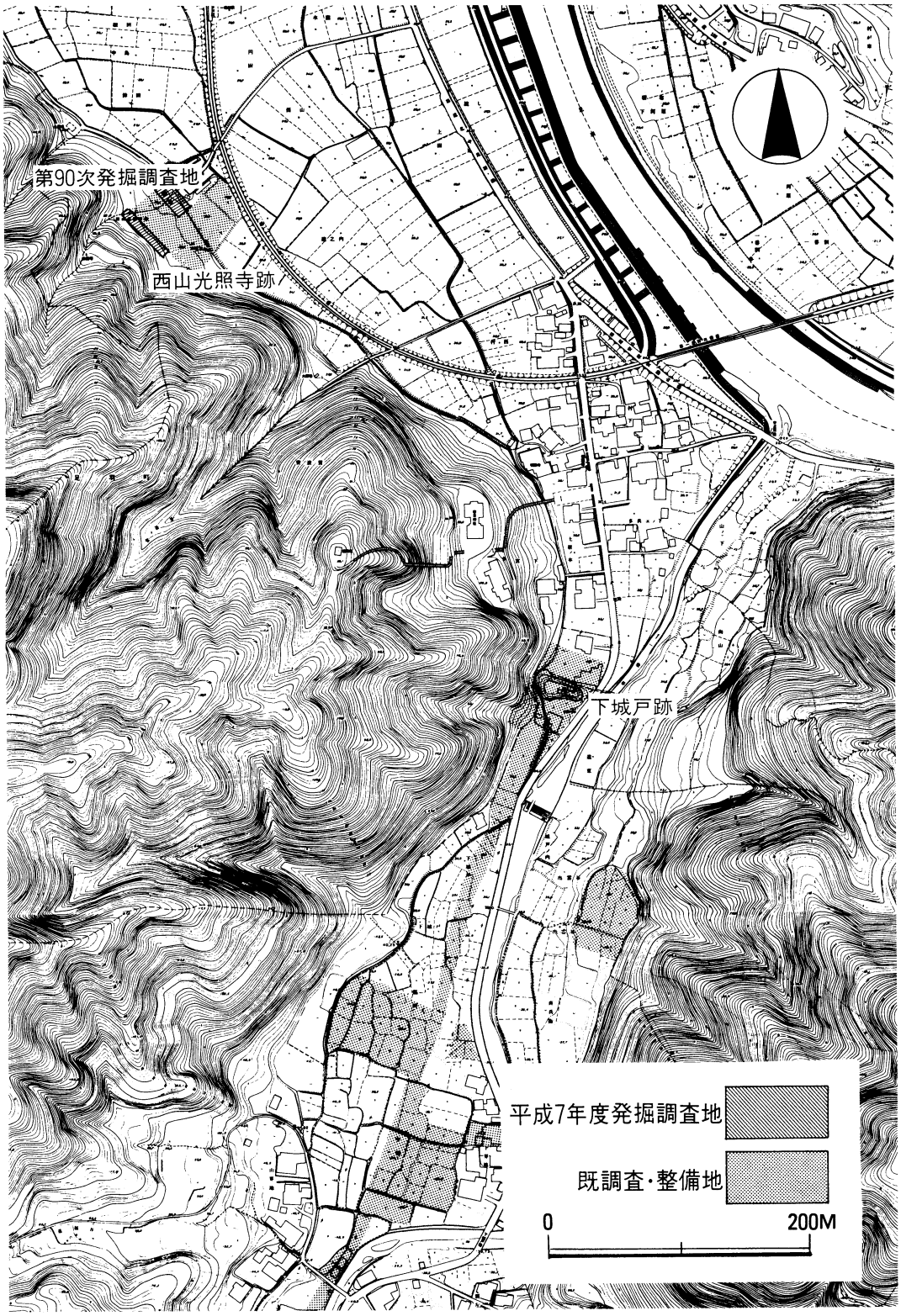
また、一乗谷河川改修工事に伴う事前調査として、朝倉館前の一乗谷川の部分を調査した。調査地区の大部分は一乗谷川の氾濫によって当時の遺構は残存していなかったが、一乗谷川の岸に１ｍほど高くなったところがあったが、ここは当時の土塁の遺構一部でその北側に巨石を並べた護岸が確認された。これはその位置から土塁の石垣も兼ねている。

（岩田）

調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
90次調査	安波賀中島町字西山光照寺	４月３日～７月18日	800m²	計画調査
91次調査	城戸ノ内町字瓜割流	８月23日～９月８日	100m²	現状変更に伴う事前調査
92次調査	東新町字安養寺	７月19日～12月26日	2,600m²	計画調査
93次調査	城戸ノ内町字上川原	９月18日～10月４日	200m²	現状変更に伴う事前調査
94次調査	城戸ノ内町字新御殿	10月10日～12月26日	1,400m²	現状変更に伴う事前調査

環境整備箇所	工事期間	整備事業
城戸ノ1内町河合殿(77・78・83次地区)	４月１日～８年３月31日	立体復元地区内の武家屋敷平面整備

	期間	事業内容
保存処理	４月１日～８年３月31日	鉄製品200　銅製品200　木製品400



第1図　調査・整備地区位置図(1)

第2図　調査・整備地区位置図(2)

II. 第90次調査

西山光照寺跡については、平成６年度に発掘調査を行なっている。その際山裾寄りのところで墓地が４カ所見つかったので、墓地の山裾の土砂に墓地がもっと埋まっていると考えて発掘調査を行なうことにした。ほかに、参道に向い合うように並んでいる石仏が並んでいるが、そのつきあたりのところが門と推定して発掘調査を実施した。

西山光照寺は、朝倉孝景が伯父の鳥羽将景を弔うために、天台宗の高僧盛瞬上人を招いて再興したと伝えられる寺院である。その後上人の教えによって石仏・石搭が多数造立されるようになった。

調査は４月３日に開始し、７月18日にほぼ調査を終え、12月13日に91次調査と併せてヘリコプターによる航空測量のための写真撮影を行ない、調査を終了した。

遺　構（第３図，PL１～５）

西山光照寺跡は、昨年度の調査では東半分が削平され遺構の残りはあまり良くなかったが、山裾寄りの本堂などの主要な建物があったと考えられる平坦面は、上下２段になっていて、上段は建物の規模はわからなかったものの、その礎石からかなり立派な建物が建っていたことは確認した。下段は大きい地下倉庫と考えられる石積み施設を確認した。

この上の段の南寄りから墓と考えられる遺構が４基見つかり、山裾には墓が多数存在すると考えて調査した。しかし、山裾にはこれ以上墓は見つからなかった。

また、西山光照寺の門にあたると推定されるところは、石仏が積み上げられてあって昨年度は調査できなかったが、今年その整理の方法等が決まったので調査を実施した。

なお、昨年度と隣接しているので、昨年度の記述と重複や、変更がある。

ST4424　昨年度の調査で、笏谷石を平らに敷いた墓４基と自然石の平らな面を利用した墓１基が見つかったが、山裾に墓がもっと多数存在すると想定し、今年分とあわせて墓を開いて調査することにしたので、これら石の下側の調査は行なわなかった。なお、これらの平らな石の上に五輪等や宝筐印搭などの墓石は存在しなかった。

しかし、今年の調査では、新たに墓を発見することはできなかった。そこで、扁平な石をめくって下を調査したが、土壙も見つからなかった。扁平な石は笏谷石を50cm程の大きさに加工したものである。なおこの扁平な石は最初から墓のためにつくったのではなく、なんらかの製品を再利用したものである。

SD4461　この溝と思われる遺構は、墓ST4424の西に隣接してある。長さは1.5m程しかなく、深さも人頭大の石が一列に並んでいるだけなので25cmしかない。位置や長さからして

もその性格は不明。

SX4451　墓地周辺からから溝SD4461までの間は小砂利が敷きつめられていた。

SD4460　山裾から流れでる溝で、SD4413につながる。山裾側半分はやわらかい岩盤を堀っただけの溝で、途中から石組の溝となっていた。山裾からの溝だけに夏の渇水期にも水が途切れることはなかった。

SX4469　前年の調査でも、山裾側は黒い細かい炭層で覆われていた。とくにSX4439は炭が詰まっていた。その外SX4470～4471のピットでも炭が詰まっているものが多かった。いくつかのピットが存在したが、建物の柱列や棚列になるものはなかった。

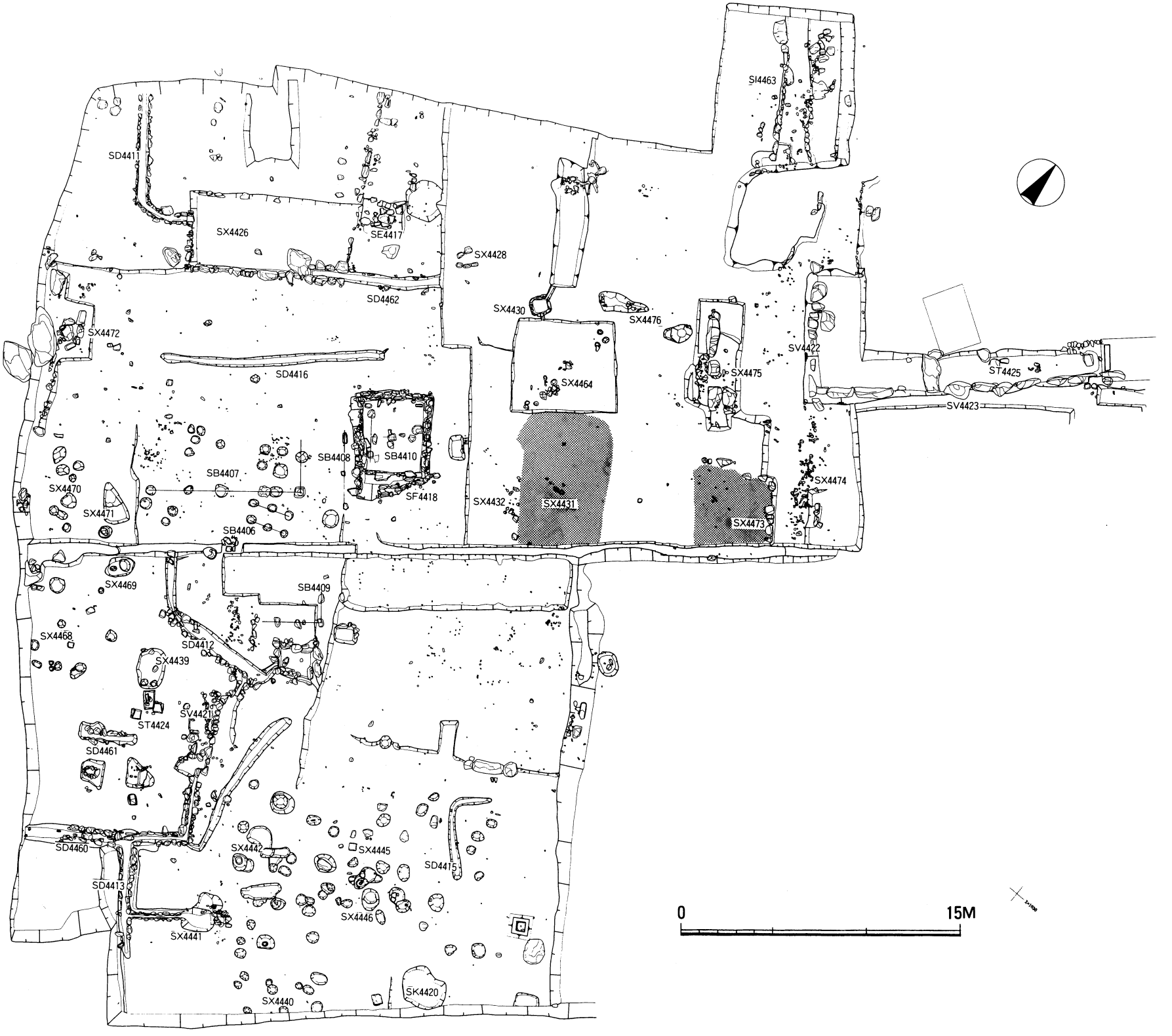
SX4475　この遺構はもともと地表に露出していた。中央の自然石の立石は真盛上人、盛舜上人の供養碑で、梵字の下に両上人の名前、造立年・理由等刻まれている（「一乗谷石像遺物調査報告書Ⅰ」参照)。隣にある横にした石には何も刻まれていない。南側には平らな石が敷かれたような状態である。また、この供養碑周辺は周囲より一段高くなっており河原の小砂利が多数存在するが、敷きつめられている状態とまではいえない。

この、供養碑の周辺の３箇所から少量の火葬骨がまとまってみられた。西側に２箇所、南側に１箇所あり、その上には墓標や関連する遺物はなく、これらの墓地の時期などを推定する手がかりは見つからなかった。

SX4473　供養碑の南にある石列で、この石列から東が一段低くなっている。また、その段の西側は小砂利が敷きつめてあった。

SI4463　石仏が並んでいる正面にあたるところが門と考えて調査したところ、階段が見つかった。幅は8.1ｍあり、階段は３段分確認した。おそらく石仏が並んでいる前の平坦面が階段の基底部であろうが、農道が存在するため確認することができなかった。基本的には自然石をもちいたゆるい段となっている。階段の南側に大振な石がある。これに対応するように、やや元位置を動いているようであるが、北側にもほぼ同じ大きさの石がある。この両石の上にも階段らしき石があったが、これは笏谷石の五輪搭を転用した石をもちいており、おそらく一乗谷滅亡後、西山光照寺が再興される際、新たな整地面に合わせて段階が積み重ねられたのであろう。なおこの階段のうえに五輪搭や石仏を集めた台がつくられ、さらにその上に地蔵菩薩が安置されていた。

SX4426　前回SA4405とした石列の確認を行なったところ、石列の北側が浅い溜め桝が見つかった。規模は8.6ｍ×4.0ｍで深さは0.5ｍほどある。この溜桝に溝SD4411が流れこむ。出口はおそらくSD4462であろう。　（岩田）



第3図　西山光照寺跡第86・90次調査遺構図

遺　物（第４～５図，PL６～７）

第90次調査は山裾の調査だったので、あまり出土遺物は多くない。出土遺物の点数は表１のとおりで、基本的には越前焼、土師質皿、瀬戸美濃製の鉄釉・灰釉、輸入陶磁器である青磁・白磁・染付などがある。そのほか、西山光照寺は一乗谷滅亡後も庵が存在していたので、近世から近代の遺物が割合多くみられる。

今回は、第90次調査で出土した遺物を紹介するが、とくに場所や層位などを限定していない。また第89次調査出土と接合して復元できたもの形になったものも一部掲載した。

越前焼　(1)はSD4460付近の杉の切り株を起していた時に出土したもので、出土土層は確認できないが、蔵骨器として使用されていたものであろう。割合肩の張った器形に短い頸部がつく。器高は18.5cm、最大幅は19.0cm、口径は11.0cmを測る。(2)は器高44.3cm、最大38.8cmと大型の壺で、よく張った肩に、短く外反する口頸部がつく。一乗谷から出土する越前焼き壺としては古手に属し15世紀前半と考える。(3)は浅鉢、(4)は直径が12cm程しかないので建水の様なものであろうか。

器種				点数	%
日本製陶磁器	越前焼		甕	1099	
			壺	677	
			鉢	95	
			擂鉢	185	
			火桶	51	
			盤	6	
			花入れ	2	
			その他	1	
			合計	2116	30.36
	瀬戸・美濃	鉄釉	碗	40	
			小壺	31	
			皿	2	
			桶	5	
			茶入れ	2	
			壺	124	
			花瓶	1	
			その他	2	
			合計	207	2.97
		灰釉	碗	6	
			皿	22	
			香炉	10	
			壺	23	
			その他	1	
			合計	62	0.89
	黄瀬戸		鉢	3	
			合計	3	0.04
	銅緑釉		碗	1	
			その他	2	
			合計	3	0.04
	土師質		皿	2217	
			土釜	2	
			壺	3	
			その他	1	
			合計	2223	31.90
	瓦質		風炉	2	
			壺	2	
			その他	9	
			合計	13	0.19
	信楽		壺	14	
			合計	14	0.20
	国産		その他	65	
			合計	65	0.93

器種			点数	%
中国製陶磁器	青磁	碗	11	
		皿	28	
		鉢	28	
		香炉	15	
		壺	5	
		角杯花瓶	9	
		花瓶	33	
		梅瓶	4	
		酒会壺	3	
		その他	6	
		合計	142	2.03
	白磁	皿	191	
		蓋	1	
		その他	6	
		合計	198	2.80
	染付	碗	31	
		皿	138	
		杯	4	
		その他	1	
		合計	174	2.49
	中国	褐釉壺	12	
		壺	1	
		茶入れ	4	
		その他	1	
		合計	18	0.25
	青白磁	梅瓶	24	
		その他	4	
		合計	28	0.40
	朝鮮	碗	58	
		壺	3	
		合計	61	0.87
	近世	越前	129	
		陶磁器類	808	
		擂鉢	2	
		壁土	13	
		瓦	36	
		風炉	11	
		その他	103	
		合計	1102	15.81

器種			点数	%
	金属	銅銭	7	
		釘	64	
		銅製品	2	
		くさび	1	
		かすがい	1	
		香炉	1	
		鉄砲玉	2	
		鉛	1	
		キセル	1	
		その他	4	
		合計	84	1.20
	石製品	バンドコ	99	
		風炉	62	
		炉	11	
		硯	20	
		砥石	21	
		盤	28	
		玉石	8	
		茶臼	2	
		蓋	5	
		建築具材	4	
		水桶	2	
		炉囲	5	
		石龕	1	
		仏台	2	
		花崗岩	2	
		バンドコ蓋	1	
		臼	1	
		その他	155	
		合計	429	6.15
	木製品	炭	1	
		仏像	1	
		合計	2	0.03
		人骨	6	
		その他	7	
		不明	12	
		総合計	6969	100

表１　第90次出土遺物破片数組成表

土師質皿　(5～12)は、越前焼壺(1)が出土した付近から割合まとまって出土した土師質皿の一部である。器形的にはC類とD1類がほどんどであったが、灯明皿として使用されたことを示す煤やタールがすべての土師質皿に付着していたわけではなかった。

瀬戸・美濃製品　鉄釉の天目茶碗(13～16)がもっとも多い。鉄釉小壺のうち茶入として使用されたものも他の地区と比較して多いようである。(17)は口縁部大きく広がり頸部に四角に耳の付くが鉄釉花瓶で、瀬戸の小名田窯下窯に同類がみられる。(18)は鉄釉の葉茶壺で、口頸部がすっきりと立ち上がる。轆轤でしっかりと挽かれているが、内面にあまり轆轤目が残されていない。釉はむらむらと掛かっているが、刷毛で塗ったものではない。灰釉では皿が多く、(20～22)のようにやや大きい皿が目立った。見込みの菊花のスタンプは2箇所に押されているものもある。(23)は青磁香炉を模した灰釉香炉で釉は2次的な火を受けてほとんどかせている。

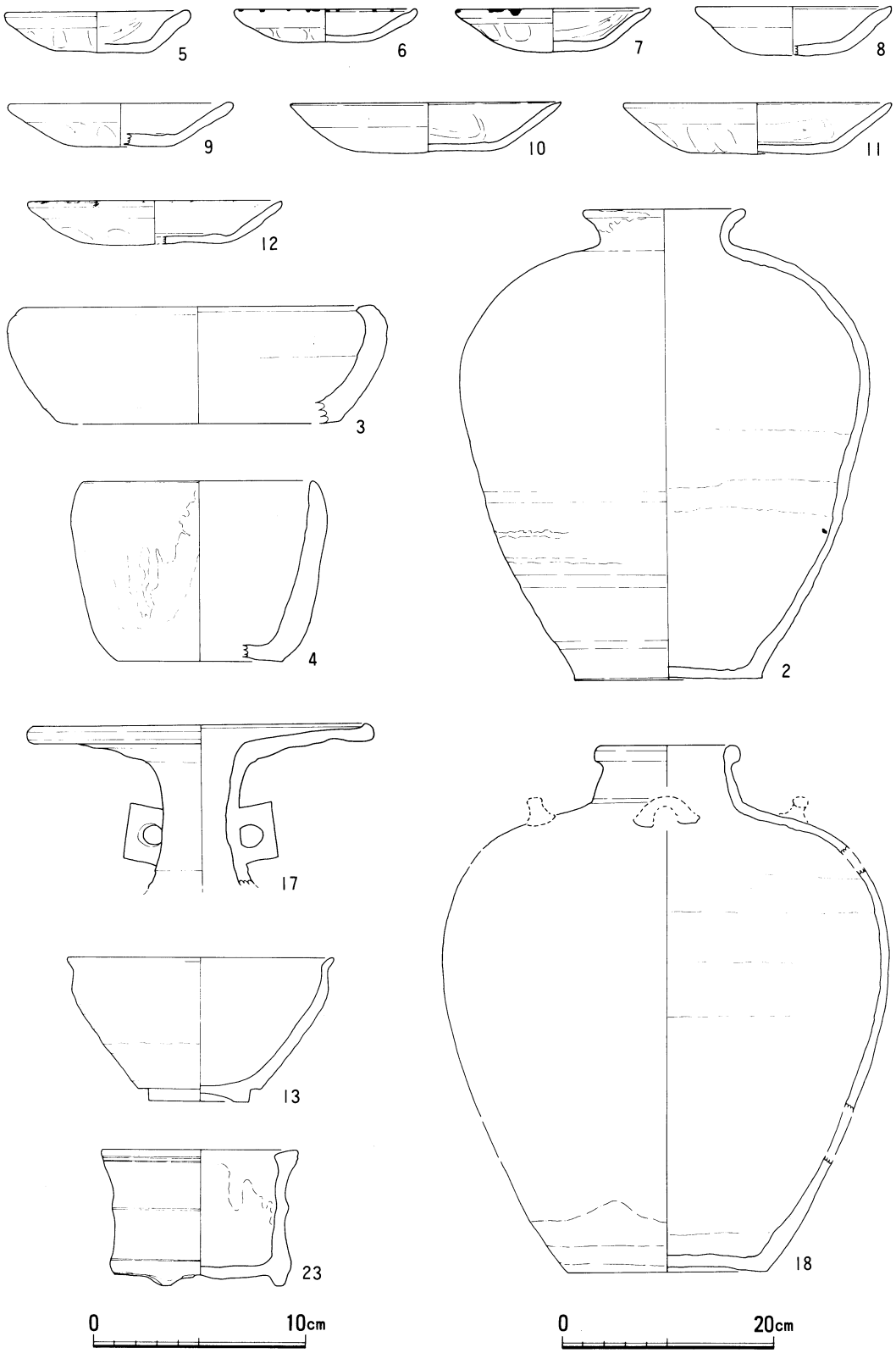
中国製陶磁器　(26)は青磁の水注で林檎のような形をしている。白磁に同類の水注がある。(27)は角杯型の青磁一輪挿で、壁に吊すための穴は焼成後あけられたものである。おそらく日本に輸入されたのちに開けられたものであろう。(28～30)は端反の白磁皿で、皿ではもっとも多い。染付は碗と皿があるが、皿が4倍ほど多い。(31)は梅月文の碗、(32)は芭蕉文、(33)は腰部に蔓草文が巡る。これらはいずれも蓮子碗タイプのC類碗で、(34)は饅頭心タイプのE類碗で、主文様は梅である。(35･36)は端反の皿で、同じ文様の皿が5個体ある。外面は蔓草文、見込みは鹿と鶴の文様、口縁部に四方襷、内面体部に唐草文からなる。(38)は内湾する皿で、外面は口縁部に回線が巡るだけ、口縁部に四方襷文が巡り見込みには樹木と太古石が描かれている。このE類の皿は一乗谷ではあまり多くない。(39)は高さ50cm近い大型の褐釉の壺で肩が張り、小さく立ち上がる口頸部をもつ。頸部近くに4箇所耳が付いていた痕跡がある。底部は少し広がって上げ底状になっている。釉は黒く艶がある。(40)は高さ39cm程の壺で、直径20cmの大きめの口頸部が付く。褐色の釉が掛かる。

朝鮮製陶磁器　(41)はいわゆる蕎茶碗であるが、高台部が大きく外にふんばっている。釉は、灰色の中に小さい黒点が散らばっていて、ソバ茶碗の特徴がよく表れている。

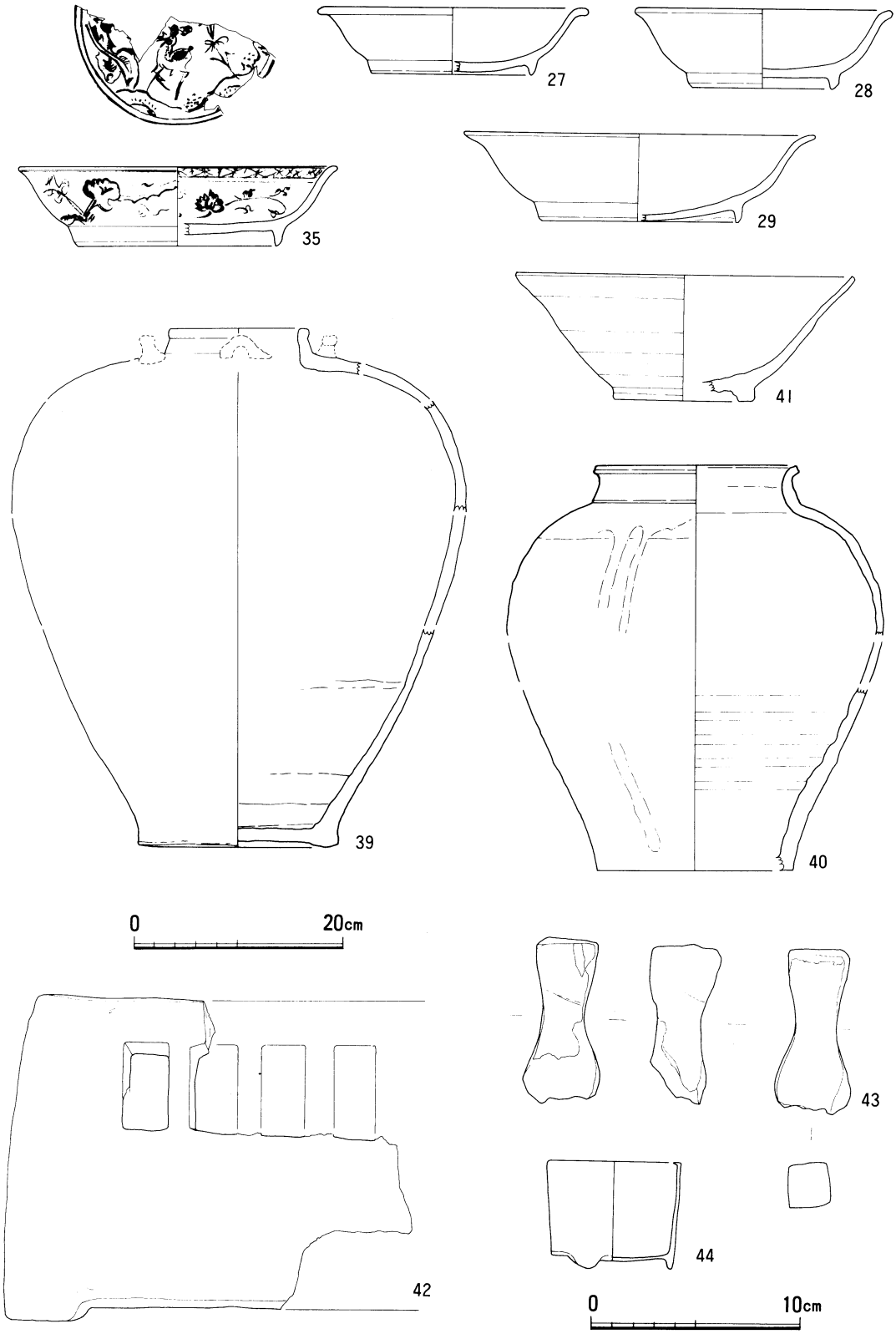
石製品　多数出土している石仏については、別にまとめている。(42)は笏谷石製の行火(バンドコ)で、平面形はD類である。(43)はよく使用された砥石で、いわゆる浄教寺砥石である。第86次調査では鍛冶関係の鉱滓も多数出土しており、それとの関連が考えられる。

金属製品　(44)は、銅製の香炉で、表面はたいへん痛んでいる。口縁部に返りがある。

(岩田)



第4図　第90次出土遺物(1)



第5図　第90次出土遺物(2)

石造遺物調査

今回の調査は、平成６年度の第86～87次調査および本年度の第90次発掘調査により出土した石造物と、北側の石仏の並ぶ参道の突きあたりに位置する、大型の石仏２体を乗せていた台座２基を解体して、調査可能になった石造物について行なった。現在も調査は継続中であり、全体数の約１／３の調査を終えた段階である。

調査方法は昭和47～49年にかけて行われた一乗谷の石塔・石仏の予備調査[(1)]を参考とし、番号を付け[(2)]、計測、写真撮影をし、銘文の残るものについては解読し拓本をとった。また出土したものについては、西山光照寺域内のどこから出土したかによって分けて調査を進めている。

現段階で調査が終わったのは、２基の台座のうち正面向かって左側の台座を崩した分と、台座周辺から出土したものと、山裾から出土した石仏の一部である。台座の大きさは約２ｍ四方、高さ約90cmで、積み上げてあった石造物は、一石五輪塔を三つに割ったものが主であった。地輪で外郭を築き、内部に空輪・風輪や火輪・水輪を詰め込んでおり、外側の地輪については過去に調査が行われたものもあるが、今回改めて調査した。

左台座の377個の石造物のうち、石仏・石塔と判別できるものは240体あり、一石五輪塔は192体であるが、完形のものは一体もなかった。部位ごとに見てみると空輪・風輪の個数は78体、地輪は59体で若干少なかった。これは台座が、地表に散乱していた石造物のうち適当な大きさのものを選んで積み上げられたか、台座に積み上げるために故意に分割したものを使ったためと思われる。一石五輪塔は五輪種字を四転させたものがほとんどであるが、法華題目を刻んだものが６体、種字を正面にのみ刻んだものが3体あった。組合せ五輪塔も若干含まれており、空輪の直径が25cm以上のものも３体あったが、空輪・風輪のみで他の部分はこの群にはなかった。また梵字にわずかながら朱の彩色の残るものも２体見られた。宝篋印塔の相輪の一部も見つかったが、その他の部分はなかった。また笠塔婆の塔身が3体あった。

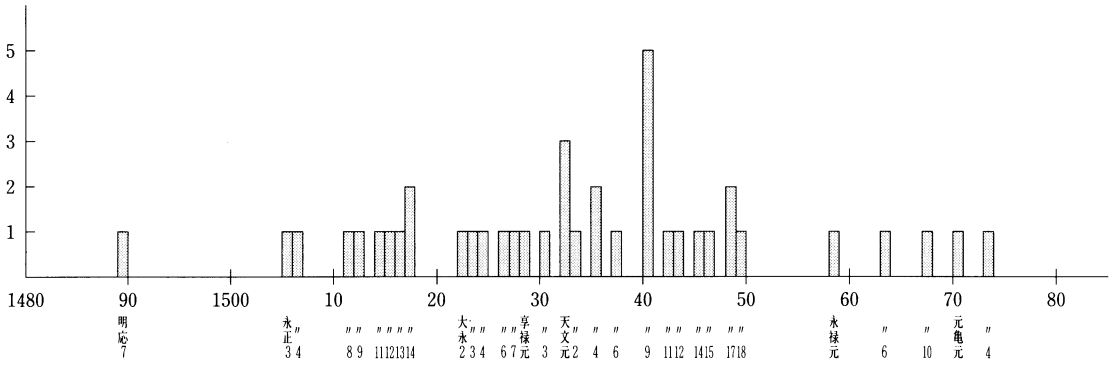
左台座に並ぶ位置には、阿弥陀三尊種子と真盛上人・盛舜上人の名を刻んだ自然石板碑があるが、この周辺からも石仏・石塔が出土した。121個の石造物のうち石仏・石塔と確認できるものは56体で、うち一石五輪塔は33体であった。部位ごとにみると完形が１体で、地輪があるものが12体あった。組合せ五輪塔は、２つに割れてしまっているが直径41.5cmの水輪が１体と、「陀」の文字の彫られた直径28.5cmの水輪1体と、高さ29.0cmの火輪が１体というように比較的大型のものが出土した。石仏は４体あり、地蔵菩薩が１体、千手観音が１体、欠損が激しく不明のものが２体であった。宝篋印塔の基礎が２基あった。また

石龕の屋根の部分が出土した。

山際の方から出土したものについては調査が途中であるが、264の遺物のうち石仏・石塔と判別できるものは88体である。一石五輪塔は30体であったが、破損して水輪や地輪の一部というものが多く、地輪で何らかの銘文が確認できるものは14体であった。空輪部分は２体しかなかった。ここでは五輪塔を線刻あるいは浮彫りにした板碑が９体出土した。しかし欠損が激しく一部分を残すのみである。 また五輪塔の形の板碑も火輪・水輪の部分のみであるが１体出土した。石仏は15体あり、反花座の彫刻のある基礎の部分が23体出土した。基礎は25cm四方の大きさで、上に16cm四方ぐらいの石塔を置くことができるような小型のものが多かった。石仏は15体出土したがいずれも欠損が激しく、種類は不明のものが多かった。

まだ、年号までわかる石造物は43体しかないので、年次別の分布状況は確定しないが、グラフにすると下記のようになる。 (宮永)

グラフ１　個体数の年次別分布



注

(1)石造物の名称については、『一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ』の分類名称を踏襲する形をとった。また、板碑については『板碑の総合研究②地域編』の中部・近畿地方の例を参考にした。

(2)今回調査した石造物の中には、調査済みのものもあったが、前回の調査で付けた番号が消えてしまっていたり、読みにくくなっているものが多かったので、重複を確認した上、改めて番号を付けた。

付記　調査報告作成に際しては、分類不明の石造物や銘文の読めないものもあった。いろいろご教示をいただいた千々和到氏には厚くお礼申し上げる。

銘文集成

（凡例）　1．寸法は単位cmで、それぞれの最大値を記入した。

2．五輪種字が四面に転回しているものは、四転とした。

3．梵字は銘文に加えていない。

4．欠字は□で表わす。また、／は欠けていることを表す。

5．備考欄の番号は前回の予備調査で付けられた番号。

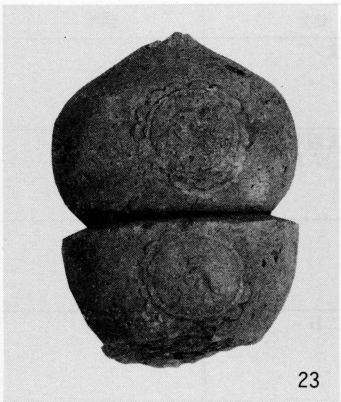
No.	場所	種類	部位	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	銘文	備考
2	左台座	一石五輪塔	空風	15.9				13.3	妙法	梵字なし
4	左台座	一石五輪塔	火水	16.5		14.2	10.5		蓮華	梵字なし
16	左台座	一石五輪塔	火水	18.3		16.5	10.0		蓮華	梵字なし。割付け線あり。
21	左台座	一石五輪塔	空風	15.3				12.1	妙法	梵字なし
58	左台座	一石五輪塔	空風	14.5				14.3	妙法	
60	左台座	一石五輪塔	空風 12.5					13.0	妙法	
65	左台座	一石五輪塔	火水地	43.5	18.5 幅 18.0 厚 17.5	19.0	14.0		為昌林紹繁禅定門 永正三年八月廿一日	五輪種字四転
81	左台座	一石五輪塔	地	20.5	20.5 幅 14.8 厚 14.8				享禄三年 妙珎禅定尼 十月三日	梵字二面のみ
85	左台座	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 15.0 厚 15.5				天文十七年 教西禅門 □月廿七日	四転
86	左台座	一石五輪塔	地	23.0	23.0 幅 16.0 厚 16.5				享禄五年壬辰 □□比丘尼 五月九日	四転
91	左台座	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 13.0 厚 14.0				天文十七□ 花溪妙栄大姉 九月廿一日	四転 裏面　天文十□□ 姉□□□ 九月廿一日
93	左台座	一石五輪塔	火水地	44.0	23.0 幅 18.0 厚 18.0	18.0	9.0		元亀□□ □□禅定門 □月十一日	四転
94	左台座	一石五輪塔	地	25.0	25.0 幅 16.5 厚 16.5				□□十年 □□□□ 七月廿五日	割付け線三本あり。法名の下に蓮座あり。
95	左台座	一石五輪塔	地	23.0	23.0 幅 17.5 厚 16.5				□□□□ □盛大姉 十月□□	四転
100	左台座	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 14.7 厚 13.0				天文十一年 裕□童子 五月廿二日	四転

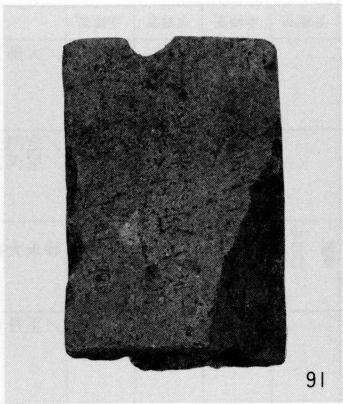
No.	場所	種類	部位	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	銘文	備考
101	左台座	一石五輪塔	地	24.6	24.6 幅 18.0 厚 17.5				妙春禅定尼 □□□□	四転
107	左台座	一石五輪塔	水地	35.0	23.0 幅 15.8 厚 16.0	16.3			大永七年 妙西禅尼 三月廿六日	四転
108	左台座	一石五輪塔	地	22.6	22.6 幅 16.0 厚 15.3				妙念	梵字正面のみ。
112	左台座	一石五輪塔	地	23.2	23.2 幅 17.4 厚 17.4				天文十二年 □□大姉 □月□□	四転
113	左台座	一石五輪塔	火水地	46.0	19.2 幅 19.2 厚 19.5	19.8	12.8		道本□□ 永正十二　正月七日	四転
114	左台座	一石五輪塔	地	20.0	20.0 幅 17.6 厚 14.9				□□貞□大姉 永正十四天十一月十□	四転 Ko161
122	左台座	一石五輪塔	地	28.5	28.5 幅 20.0 厚 20.5				千慶妙富禅定尼	四転
127	左台座	一石五輪塔	地	22.0	22.0 幅 15.5 厚 14.0				天文十五年□ 祐清童女 九月二日	四転
128	左台座	一石五輪塔	地	20.0	20.0 幅 18.0 厚 17.5				為道珎禅門 □正八天七月六日	四転
129	左台座	一石五輪塔	地	18.5	18.5 幅 14.0 厚 14.5				西智童／ 天文九年庚子七月八日	四転
137	左台座	一石五輪塔	地	18.8	18.8 幅 18.0 厚 17.0				為金忠禅尼 明應七天七月卅日	四転 Ko168
139	左台座	一石五輪塔	地	20.5	20.5 幅 16.1 厚 15.8				天文九年庚子 教賢禅定門 八月□□	四転
142	左台座	一石五輪塔	火水地	48.5	22.0 幅 17.5 厚 17.7	18.5	12.5		妙□禅尼 永正十四	四転
143	左台座	一石五輪塔	火水地	45.0	21.0 幅 15.8 厚 15.5	15.8	12.0		天文九年庚子 法性禅門 七月四日ハウソハラ	四転
146	左台座	一石五輪塔	火水地	44.0	21.3 幅 17.4 厚 17.0	17.3	11.0		□□□門	梵字不明
149	左台座	笠塔婆	搭身		38.0 幅 14.0 厚 12.5				永禄元天 妙法連華経□受禅定尼 八月八日	上下に凸部あり。法名の下に蓮座の彫刻あり。
153	左台座	一石五輪塔	火水地	46.5	22.3 幅 16.0 厚 16.3	18.2	10.8		大永四天甲申 舜有法師 五月廿二日	四転
155	左台座	一石五輪塔	水地	36.0	幅 17.5 厚 17.4	18.2			大永二年 道泉禅門 正月十四日	四転

No.	場所	種類	部位	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	銘文	備考
162	左台座	一石五輪塔	地	23.6	23.6 幅 16.5 厚 16.0				□□□□九	四転
164	左台座	一石五輪塔	地	22.8	22.8 幅 17.8 厚 17.8				盛□大姉	四転
165	左台座	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 15.0 厚 15.3				□岳道□禅定門 □□五天六月廿一日	四転
166	左台座	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 17.0 厚 18.0				春智法師 □□□月十五日	四転
167	左台座	一石五輪塔	地	22.8	22.8 幅 14.7 厚 15.0				□忍禅定尼 天文十五丙午四月十七日	四転
168	左台座	一石五輪塔	水地	34.0	幅 17.2 厚 16.0	18.5			天文二年□ 妙念 十二月□□	四転
169	左台座	一石五輪塔	火水地	47.3	幅18.5	18.8	13.0		永正十三丙子 盛賢禅門 四月十四日	四転
171	左台座	一石五輪塔	地	22.5	22.5 幅 16.5 厚 16.5				妙□禅尼逆修	四転
173	左台座	一石五輪塔	地	22.5	22.5 幅 16.5 厚 16.0				□□□□ 泉善禅門 十一月十□	四転
175	左台座	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 17.0 厚 17.0				妙正禅尼 ／□十一月十／	四転
176	左台座	一石五輪塔	地	26.0	26.0 幅 17.0 厚 17.0				天文十四乙巳年 妙清／ 六月／	四転
180	左台座	一石五輪塔	火水地	40.0	21.0 幅 15.5 厚 15.5	16.0	9.0		享禄元年／子 道金禅門 四月廿一／	四転
181	左台座	一石五輪塔	地	20.5	20.5 幅 15.5 厚 15.5				永禄十年 道心禅定門 □月十二日	四転 Ko158
184	左台座	一石五輪塔	地	22.0	22.0 幅 17.0 厚 17.0				大永三年 道□禅定門 十二月十一日	四転
185	左台座	笠塔婆	塔身	43.0 幅 13.0					□□□定門 南無妙法蓮華経 □□□□尼	上下に凸あり
189	左台座	一石五輪塔	地	25.0	25.0 幅 17.0 厚 17.0				元亀元年 □覚禅定門 六月廿八日	四転
191	左台座	一石五輪塔	地	21.0	21.0 幅 15.2 厚 15.0				天文六年午酉 善教禅門 三月八日	四転
193	左台座	一石五輪塔	地	23.0	23.0 幅 16.8 厚 16.5				大永六天戊子 妙貞比丘尼 五月廿二日	四転

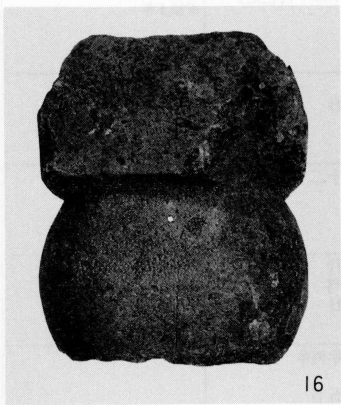
No.	場所	種類	部位	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	銘文	備考
197	左台座	板碑か		16.2 厚 6.0					逆修	裏面は研磨してない 上部欠。
199	左台座	板碑		26.5 幅 19.5 厚 8.8					舜性法師	下に凸部あり
201	左台座	板碑か	不明						／□□／ ／陽澄□□／ ／智祐□全／	欠損しているため計測不能
205	左台座	地蔵	地蔵						／禅門 ／月十七日	立像。右手に錫杖、右手に宝珠を持つ。 上部欠。
210	左台座	板碑							四月	五輪塔を線刻
212	左台座	笠塔婆	塔身	34.0 幅 17.4					正面／陀佛　二月 右　天文四己未二月時正 左　／禅定門	裏面に座像の石仏。 上部欠
377	左台座	石仏	地蔵						十五□七月十一日	上下欠損。右手に錫杖、左手に宝珠を持つ。
379	T12	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 13.5 厚 13.5				天文□□ 玄久童子 七月十日	四転
380	T12	一石五輪塔	火水地	43.5	18.5 幅 18.0 厚 17.5				為善西禅門 永正二□十一月三日	四転
382	T12	一石五輪塔	火水地	43.0	23.0	16.5	9.0		天文元年壬辰 宗見禅定門 正月□	四転
383	T12	一石五輪塔	地	24.0	24.0 幅 17.5 厚 17.5				宗信大姉	四転
385	T12	一石五輪塔	火水地	53.0	22.0 幅 21.5 厚 20.5	23.0	7.0		妙慶大姉 永正十一申戌五月七日	四転
387	T12	一石五輪塔	水地	35.5	22.0 幅 17.0 厚 16.5	15.0			元亀四壬申年 善徳周椿大姉 八月十二日	四転 Ko230
391	T12	一石五輪塔	地	19.5	19.5 幅 14.0 厚 14.0				天文九年 宗学童子 八月十六日	四転。割付け線。
407	T12	一石五輪塔	火水地	33.0	19.0 幅 12.5 厚 12.5	13.5	7.5		慶長九申辰 為妙真大姉也 三月廿四日	梵字正面のみ
409	T12	一石五輪塔	空風火水地	62.0	22.0 幅 17.5 厚 17.5	18.0	13.0	15.0	天文元年 善春禅門 九月十二日	四転
412	T12	組合せ五輪塔	水	16.5		28.5			陀	上下に凹部あり。梵字なし。 「陀」の文字の線刻あり。
413	T12	一石五輪塔	地		幅 20.5 厚 21.0				妙恩禅定尼 □月九日	四転

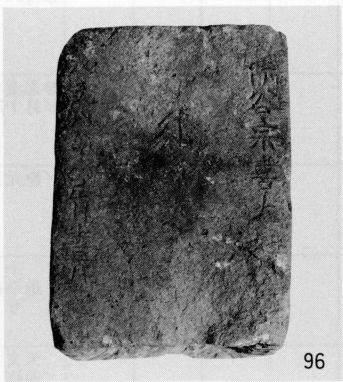
No.	場所	種類	部位	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	銘文	備考
429	T12	板碑							／大姉天文／	上下欠。
470	T12	不明							／定門天文四年 ／尼天文□六月	立像。
655	山裾	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 13.0 厚 13.5				妙永大姉	
685	山裾	板碑							／正月廿二日	五輪塔線刻あり
699	山裾	一石五輪塔	地						享禄〻年辛卯一月□□	地輪の一部 享禄４年
701	山裾	石仏	不明						妙忍童女 ／月十四日	上下欠。
718	山裾	板碑							／應元天十二月廿／	五輪塔線刻か
719	山裾	板碑							／　十二月 道幸禅門 ／　廿三日	上部欠
730	山裾	板碑							天文九年丙申 ／逆修 十月十五日	半欠
735	山裾	板碑							永正九年 善久／	五輪塔を二体線刻。上下欠。
741	山裾	不明	不明						□井主／	
743	山裾	一石五輪塔	地	22.0	22.0 厚 17.0				六月廿三日	半欠
745	山裾	板碑							／実法師 ／霊等 ／十八天辛□廿八	762の板碑の下部か。近世の板碑。
747	山裾	一石五輪塔	地	19.0	19.0 幅 18.0 厚 18.0				□□禅門 十一月十日	四転
756	山裾	一石五輪塔	地	22.5	22.5 幅 16.5 厚 15.5				天文十〻年 □□□□ 八月廿一日□	菩提門、涅槃門は梵字なし。 天文14年
759	山裾	一石五輪塔	地	21.5	21.5 幅 15.5 厚 13.0				永禄六癸亥年 □教禅定門 □月廿一□	裏面欠。割付け線三本あり。
761	山裾	一石五輪塔	地	23.0	23.0 厚 17.0				□賢禅定門	半欠
762	山裾	板碑							願 □三界萬	下部欠。745の板碑の上部か。


23

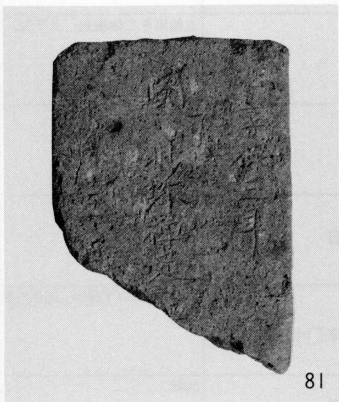

91

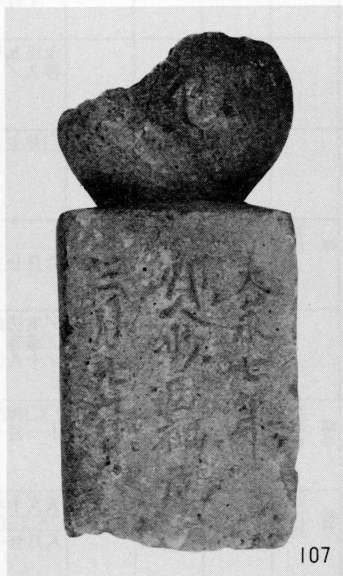
114


16

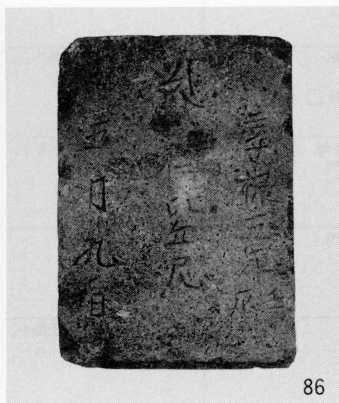

96

127


81

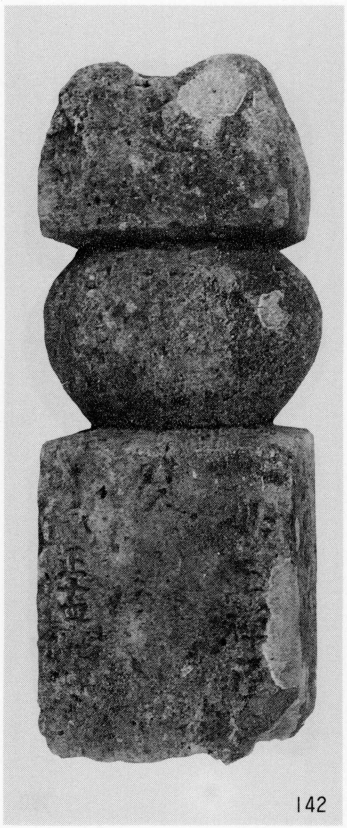

107

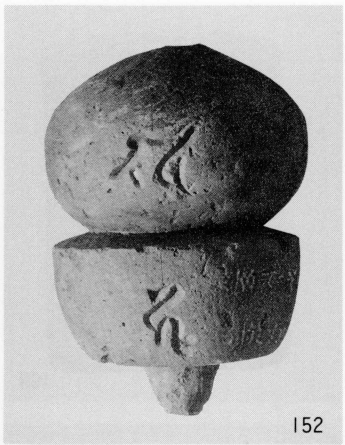
128


86

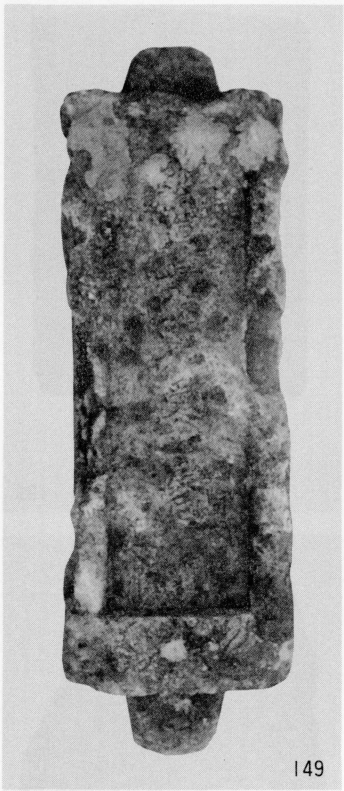
131

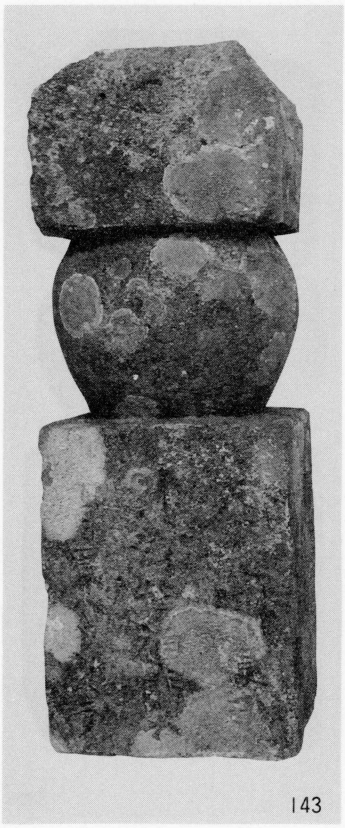
137


142

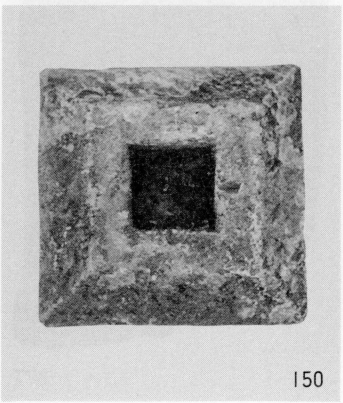

152

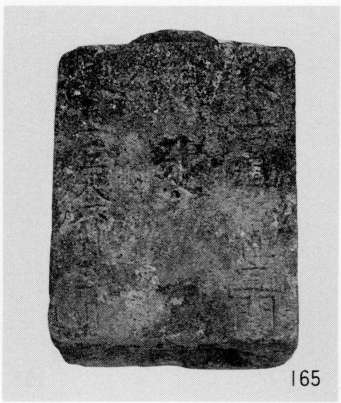
153


149

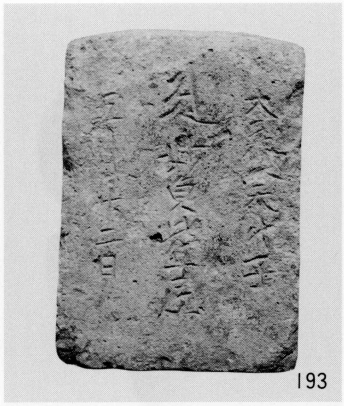

143

160

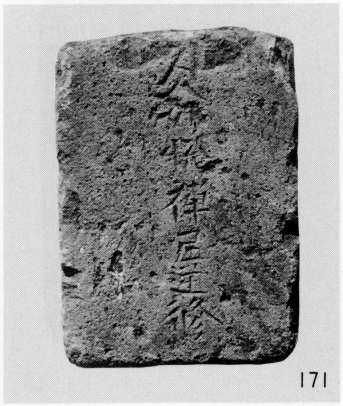

150


165

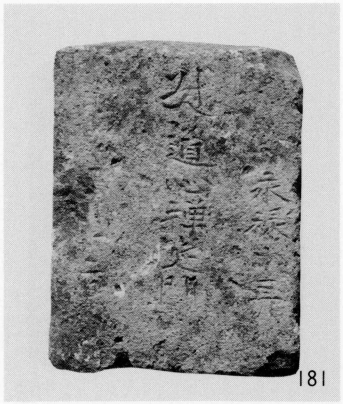
177


193

380

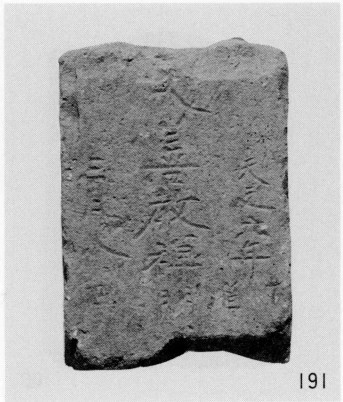

171

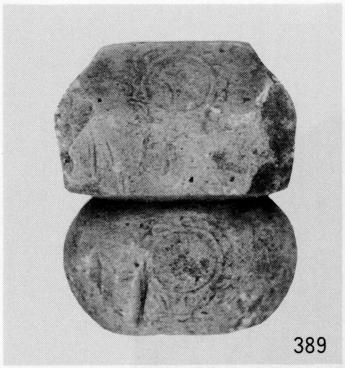
199


181

385

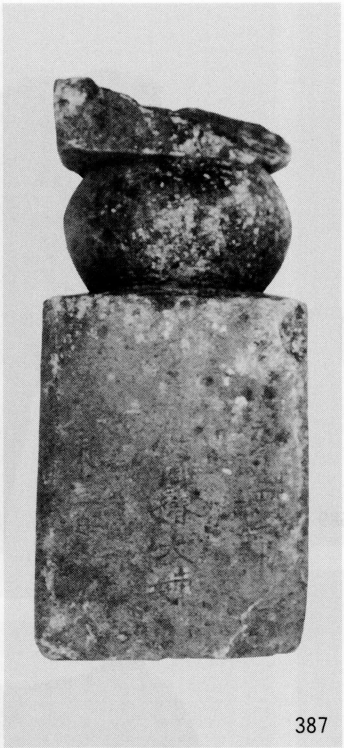
377


191



389

383



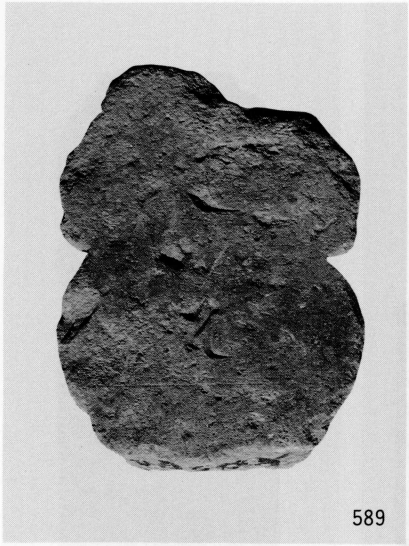
387

407

397

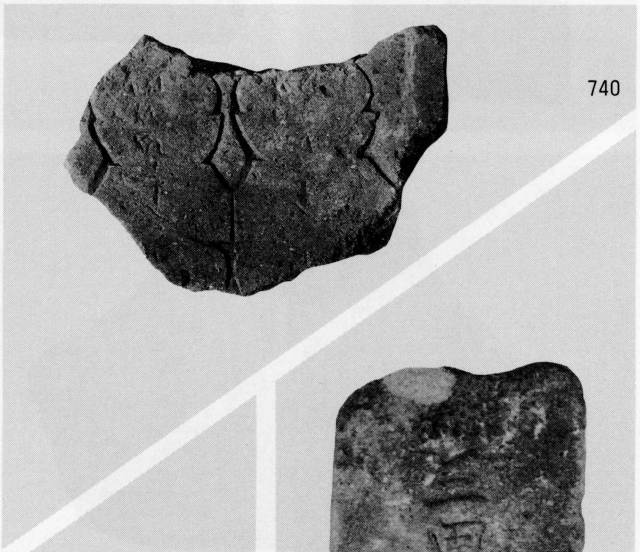
406

409

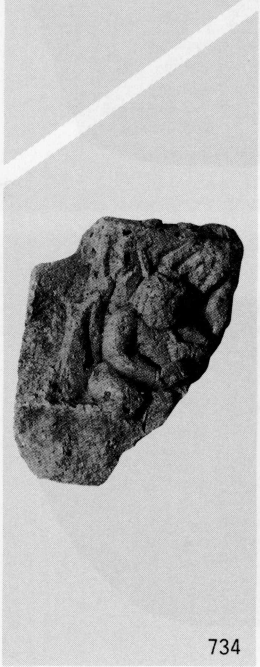

589

735

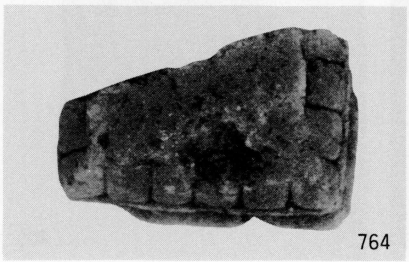
707


740

682


734

762
745


764

III. 第91次調査

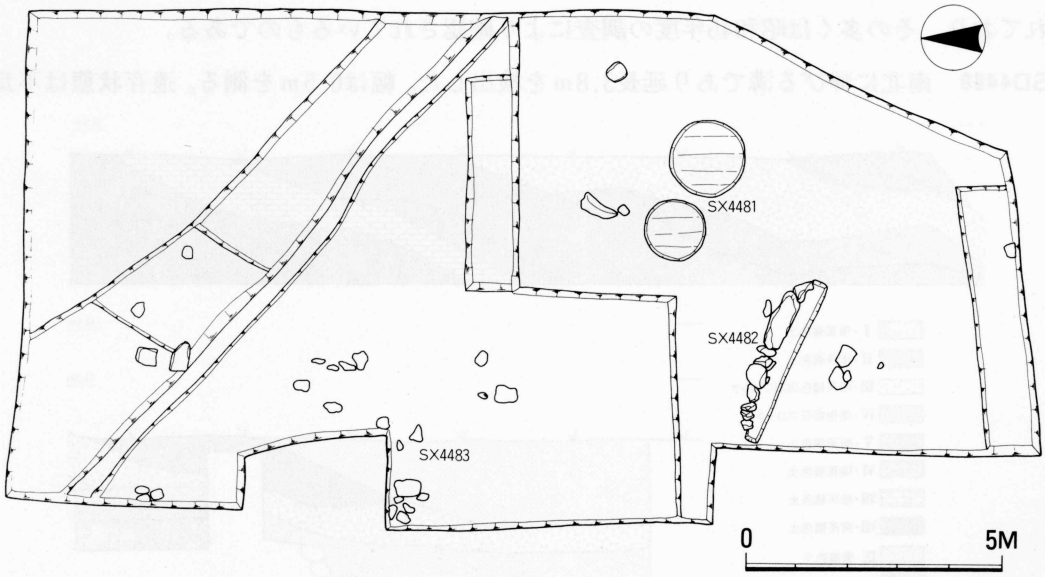
第91次調査は、斉藤宅新築工事に伴う事前調査で、地籍は福井市城戸ノ内町字瓜割流にあたる。調査面積は120m²で、調査期間は平成７年８月23日～９月８日までの約２週間であった。調査地区は、現在の城戸の内集落のほぼ中央に位置する。この周辺で、過去に家屋新築に伴う事前調査を実施しているが、調査面積が狭かったせいもあって、しっかりした遺構はつかめていない。

遺　構（第６図，PL８上）

厚さ20cmほどの表土を除去し、さらに20cm掘り下げると調査区の南東側で直径1.2ｍ程と直径1.0ｍ程の桶が見つかった。桶側の上2/3以上は失われていたが、おそらく近世末から近代の便所として使用された桶であろう。その西側で桶底と同じレベルで石列が見つかった。この層までは少量ながら近代の遺物も混じっていたのでこの石列も近世末もしくは近代の遺構であろう。

さらに中央部を40cmほど掘り下げるとまばらな砂利敷きが一部にみられたので、遺構面と確認した。その周囲には礎石らしき石も見られたが、他に対応する礎石はなかった。遺物はほとんど出土せず、土師質皿の破片と越前焼きの破片が少量出土しただけである。これより東側の一部をトレンチを入れて掘り下げたところ、もう地山となっていた。

また、北東側では近世・近代の遺構面を直下がすでに地山となっていた。　（岩田）



第６図　第91次調査遺構図全測図

IV. 第92次調査

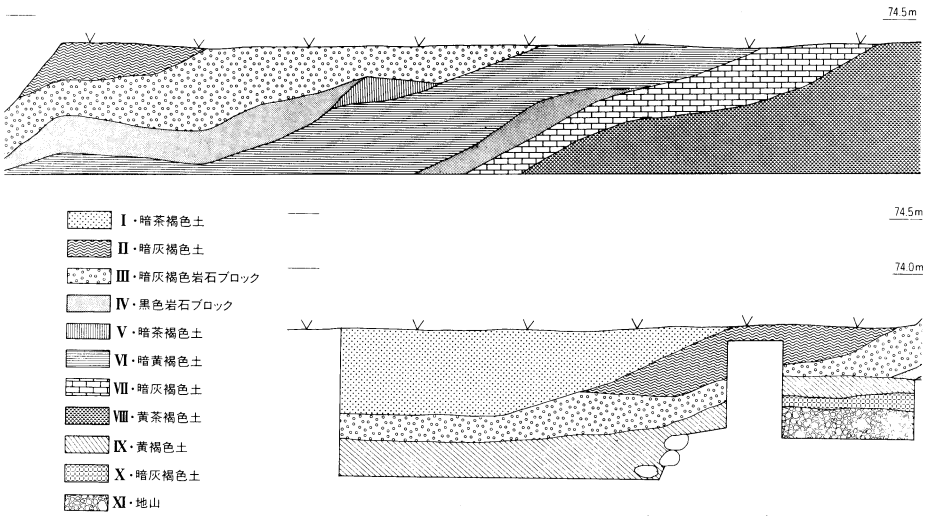
本調査のおこなわれた御所・安養寺地係は、昭和45年度に土地改良事業に伴う緊急発掘調査がおこなわれた地区でもある。(『一乗谷朝倉氏遺跡　御所・安養寺』　福井県教育委員会　昭和46年)今年度の調査では北側約1.600m²を調査対象とした。遺構の密度は希薄であり、特に北側には認められず、昭和45年度の発掘調査のおこなわれた東南部に集中して確認された。

第７図は第１トレンチ北面のセクション図である。Ⅰ層は暗茶褐色土層であり遺物を含む包含層である。Ⅱ層は暗灰褐色土層であり岩石ブロックを少量含んでいる。Ⅲ・Ⅳ層は岩石ブロック層であり、Ⅲ層は暗灰褐色、Ⅳ層は黒色を呈する。Ⅵ層は岩石ブロックを少量含む暗黄褐色土層である。Ⅶ層は暗灰褐色土層であるが岩石ブロックを多量に含む。Ⅷ層は黄茶褐色土層であり、砂岩ブロックを少量含む。Ⅸ層は黄褐色土層であるが、砂岩ブロックを多量に含んでいる。Ⅹ層は暗灰褐色層であり岩石類は含まれないが、炭化物を含む。Ⅺ層は地山層である。以上が盛土による整地状態であるが山側である東方向より、谷側である西側へ向かって整地している状況が良く示されているものと考えられる。また、整地の際には単一の土を用いず、岩石ブロック層を間層に用いるなどの工夫がこらされている。

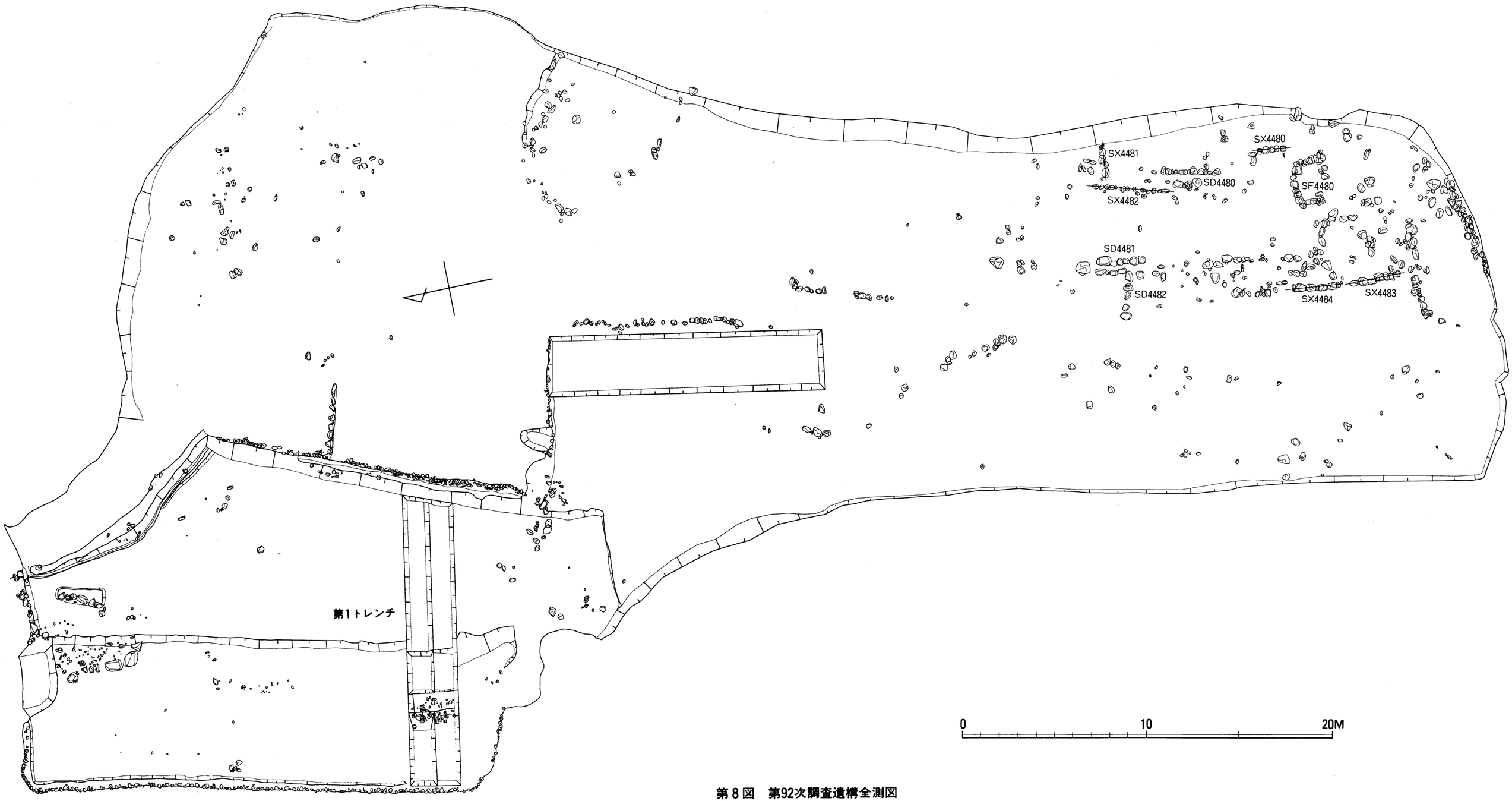
遺　構（第８図，PL９～10）

先に述べたように遺構全体の密度は低く比較的まとまって検出されたのは東南部に限られており、その多くは昭和45年度の調査により確認されているものである。

SD4480　南北に伸びる溝であり延長3.8ｍを検出した。幅は0.5ｍを測る。遺存状態は不良



第７図　第１トレンチ北面セクション図（S＝１/60）



第８図　第92次調査遺構全測図

であるが東側の石列は比較的良好に面を揃えていた。

SD4481　南北に伸びる溝であり延長2.6ｍを検出した。幅は0.3ｍを測る。東側に東西溝であるSD4482を接続する。

SD4482　東西に伸びる溝でありSD4481と接続する。北側の石列を2.6ｍにわたり検出したが、南側の石列は遺存していなかった。しかし、SD4481との接続部の状況から幅は0.3ｍを測るものと想定される。

SF4480　方形を呈する石積遺構であり規模は1.8×1.3ｍ・深さは0.5ｍを測る。南面の石積がやや不良であるほかは、比較的良好な遺存状態を呈している。石積は2石を残している。

SX4480　南北に伸びる石列であり、延長2.0ｍを検出した。東側を面としている。

SX4481　東西に伸びる石列であり、延長1.8ｍを検出できたが東側が調査区外に伸びている。SX4482とは直角に交わるような配置をとっている。

器種			点数	%
日本製陶器	越前焼	甕	266	
		壺	56	
		鉢	10	
		擂鉢	117	
		火桶	2	
			451	20.4
	瀬戸・美濃焼	鉄釉 碗	15	
		鉄釉 壺	3	
			18	0.8
		灰釉 皿	5	
		灰釉 御皿	2	
			7	0.3
			25	1.1
	土師質皿		1636	96
	瓦質	羽釜	1	
		風炉	2	
		不明	4	
			7	0.3
	信楽壺		3	0.1
	須恵器不明		3	0.1
			2125	96
中国製陶磁器	青磁	碗	23	
		皿	3	
		香炉	1	
		花生	2	
			29	1.3
	白磁皿		11	0.5
	染付	碗	8	
		皿	11	
		不明	1	
			20	0.9
	褐釉壺		1	
			61	2.7
朝鮮製碗			2	
陶磁器合計			2188	98.7
金属	釘		2	
	不明		3	
			5	0.2
石製品	盤		5	
	バンドコ砥石		2	
	硯		3	
	玉石		8	
	不明		3	
			1	
			22	1
			2215	100

表２　第92次出土遺物組成表

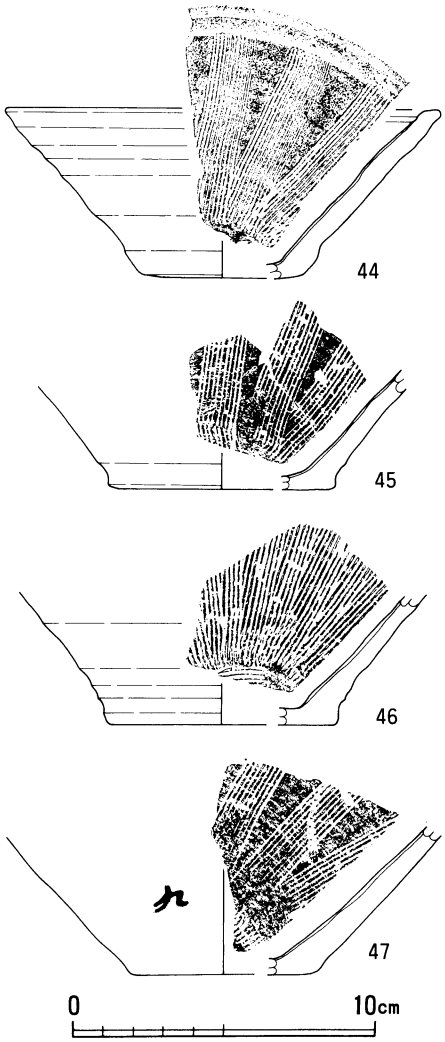
SX4482　南北に伸びる石列であり、延長4.2ｍを検出した。

SX4483　南北に伸びる石列であり、延長9.1ｍを検出した。北側を面としている。

遺　物（第９～10図・PL11）

遺物は総数2215点であり、1m²あたりの密度は1.38点に留まる。このことは、本調査地点の一部が過去に発掘調査されたことに起因するものと考えられる。出土遺物の内訳は表２に示すとおりである。また、今回の調査による遺構内出土遺物は１点とも存在せず、全ての遺物が包含層出土遺物である。

越前焼　(44)は、口径29cm・器高11cmを測る擂鉢であり、内面には11条１組の擂目を有する。(45)は擂鉢の底部片であり、内面には９条１組の擂目を有する。(46)も同様な擂鉢の底部片であるが、内面には６本１組の擂目を全体的に密に有する。(47)は擂鉢の底部片であるが、底部内面には８条１組の擂目を有し、摩滅も進んでいる。また、外面には「九」字の墨書が認められる。(48)は甕口縁部の小片であり、口径等は不明である。一乗谷においては通有のタイプである。(49)～(53)は擂鉢片である。口縁部断面形はいずれも三角形状を呈しており、口縁部内面には1条の沈線を有する。(49)(50)共に内面には９条１組の擂目を密に有している。また、(51)は不明であるが、(52)は９条１組、(53)は内面に11条１組の擂目を有する



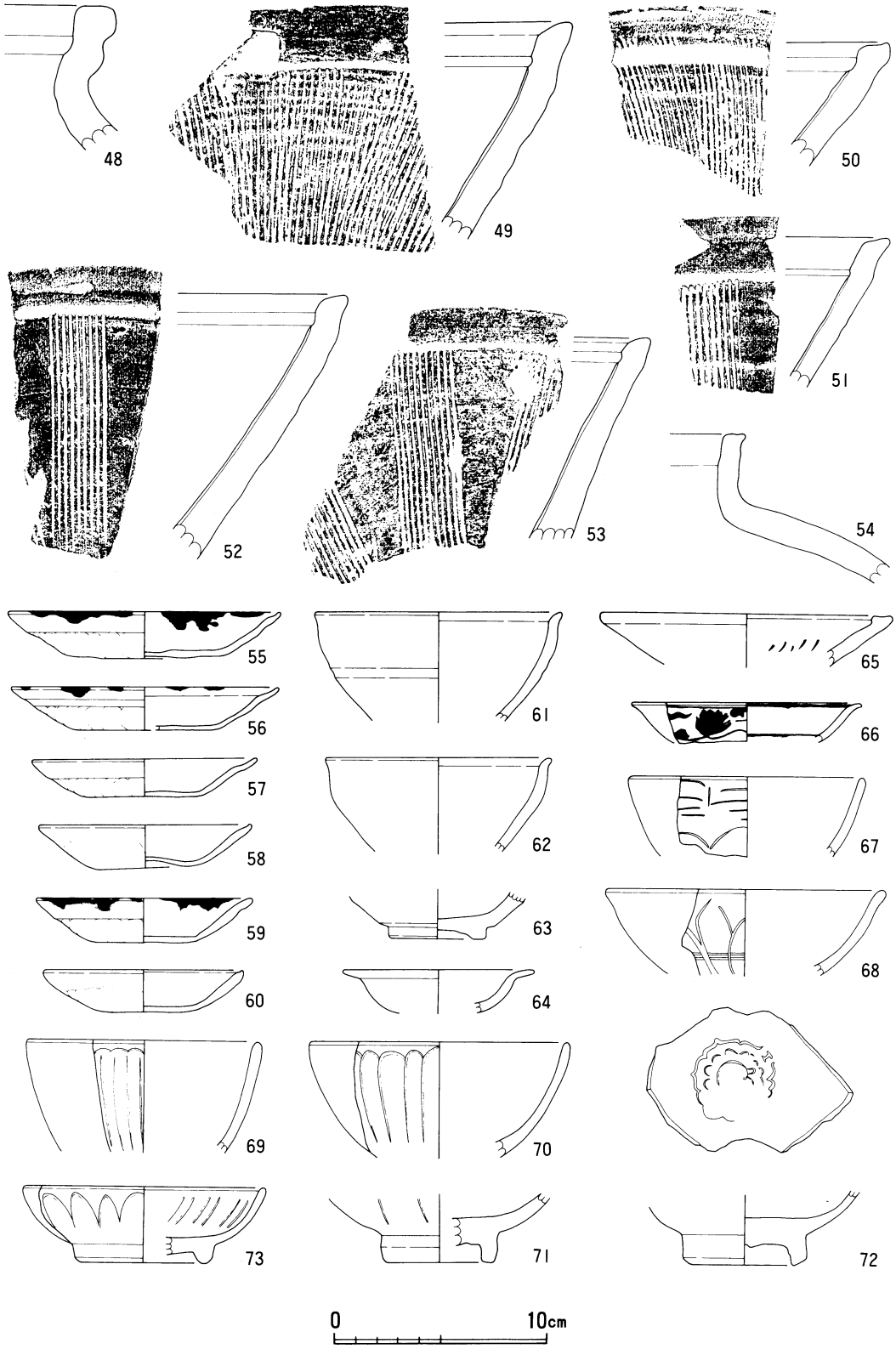
第９図　第92次出土遺物(1)

が、擂目の間隔は粗い。(54)は短頸壺の肩部～口縁部にかけての破片である。外面には自然柚が目立つ。土師質皿(55)～(56)は口径12.6～12.8cm・器高2～2.2cmを測るやや大型の物であり、共に口縁部内外面に炭化物を付着させる。(57)～(58)は、口径9.5～10.6cm・器高1.8～２cmを測る小型のものである。(59)のみに口縁部内外面共に炭化物を付着させている。これら土師質皿は体部外面下半には整形時の指頭圧痕を残しており、体部外面上半から口縁部にかけては回転ナデ調整している。

瀬戸・美濃焼　(61～63)は天目茶碗であるが全形の知られるものは無い。(61～63)は腰部～口縁部にかけての破片であり、いずれも口縁端部を外反する。(61)は口径11.5cmを測り、(62)は口径10.6cmを測る。(63)は底部～腰部にかけての破片であり、内面は施釉するが、外面は露胎である。(64)は口径9cmを測る小型皿である。釉色は白色に近い灰色を呈する。(65)は口径13.8cmを測る卸皿であり、体部内面には卸目を有する。また口縁部内外面には薄緑色の釉を施す。

中国製陶磁器　(66)は口径11.2cmを測る染付皿である。体部外面には牡丹唐草文を有する。(67～72)は青磁碗であるが全形の知られるものは無い。(67)は口径11cmを測り、体部外面には退化したと蓮弁文を描いている。(68)は口径13cmを測り、口縁部は外反する。体部外面には蓮弁文を描く。(69)は口径10.8cm、(70)は口径12.1cmを測り体部外面に線描蓮弁文を有する碗である。(71)は同じく線描蓮弁文を有する碗の底部片である。(72)は体部外面文様の有無を不明であるが、底部内面にスタンプ文を有する。焼成は不良であり、全体的に黄茶色に近い色調を呈しており、焼きも甘い。(73)は口径11.2cm・器高3.6cmを測る皿である。

(水村)



第10図　第92次出土遺物(2)

V. 第93次調査

本調査は、福井市城戸ノ内町20-5における石田浩昭氏作業小屋新築による現状変更に伴う事前調査である。調査面積は200m²であり、調査期間は平成７年９月３日～９月12日である。調査地点は昭和62年におこなわれた第59次調査によるP列33～38グリッド北側に隣接し、同調査報告によるC区に属するものである。

遺　構（第11図・PL８下）

耕作土除去後におこなった遺構確認作業において土壙１、石積遺構１および石列２を検出することができた。

SK4500　調査区南東隅で検出した土壙であり、略円形を呈するが調査区外に伸びており全形は不明である。確認面よりの深さは約0.29ｍを測る。ピット内からは土師質皿が一括廃棄された状態で多数出土しており（第12図74～80）、また、埋土は炭化物で構成されていた。

SF4500　調査区北西隅で検出された石積遺構である。主軸方位はN-57°-Eであり、規模は3.3×2.4ｍを測る。

SX4500　調査区北隅で確認した石列であり、直径50cm前後を測る石で構成されており下段の１石のみが残存していた。面は北側を向いている。

SX4501　SX4500の南側2.5ｍに位置し、SX4500に平行するように構築されている。直径40cm前後を測る石で構成されており、下段の１石のみ残存している。また、面は北側を向いている。

器種				点数	%
日本製陶器	越前焼	甕		70	
		壺		9	
		鉢		5	
		擂鉢		18	
				102	6.4
	土師質皿			1415	89.3
	瀬戸・美濃焼	鉄釉・碗		6	
		灰釉・皿		7	
				13	0.8
	瓦質	風炉		1	
		香炉		1	
				2	0.1
				1532	96.6
中国製陶磁器	青磁	碗		10	
		皿		3	
		香炉		1	
				14	0.9
	白磁皿			21	1.3
	染付	碗		3	
		皿		14	
				17	1.1
				52	3.3
陶磁器合計				1584	99.9
鉄製燭台				1	0.1
遺物合計				1585	100

表３　第93次出土遺物組成表

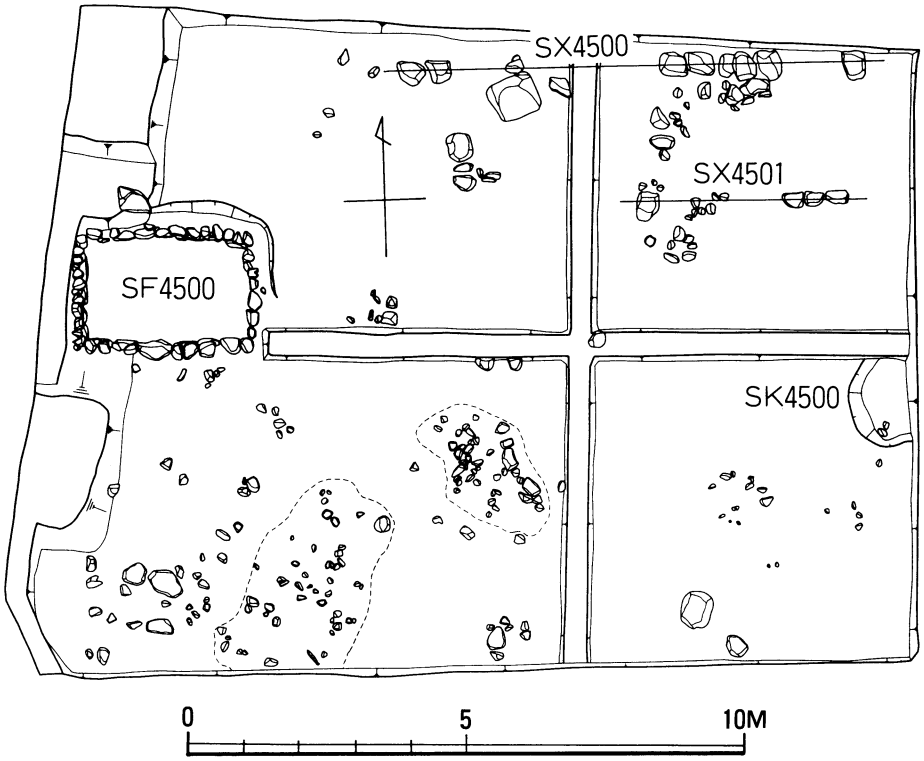
遺　物（第12図・PL13）

土師質皿　土師質皿はSK4500においてまとまって出土しており、その出土状態から一括遺物として認定されるものである。その一部を（74～80）に図示する。C・D類が多く、特にC類が大多数を占めている。

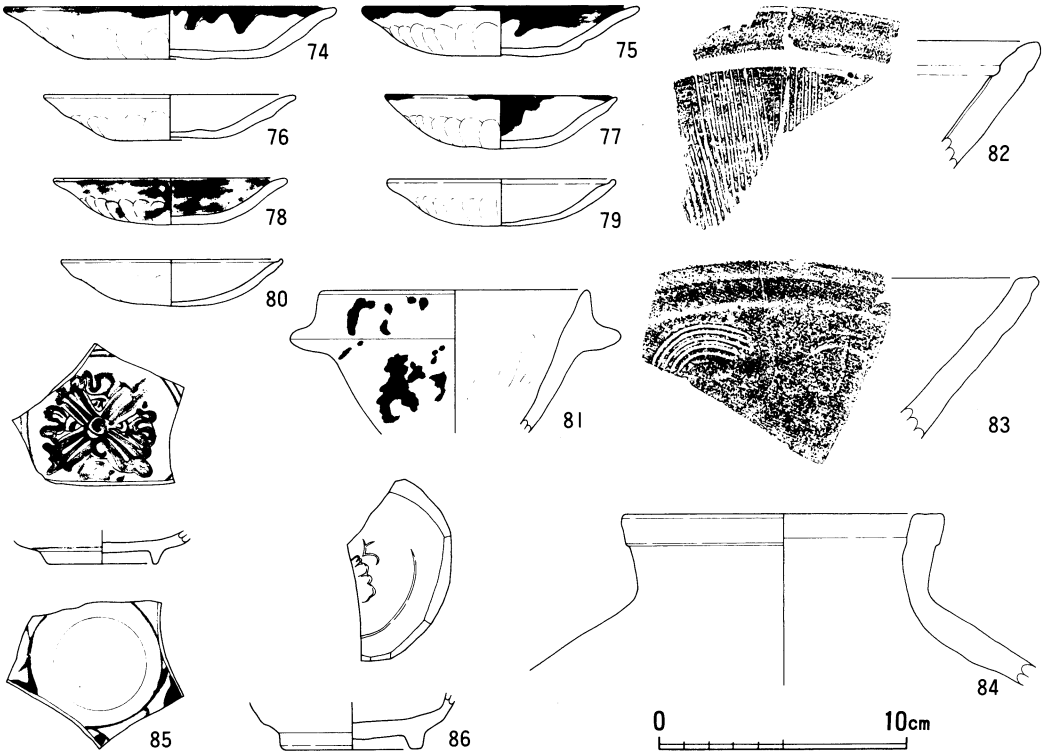
羽釜　(81)は口径10.6cmを測り、外面には煤が付着している。また、内面には指頭圧痕を有する。

越前焼　(82)は擂鉢であり10条１単位の擂目を有する。(83)は鉢であり、口縁部内面下方には５条１単位の半円文を有する。(84)は壺である。

中国製陶磁器　(85)は染付皿の底部であり、底部内面には十字花文を描く。(86)は青磁椀であり、底部内面にはスタンプ文を有する。　（水村）



第11図　第93次調査遺構全測図



第12図　第93次出土遺物

VI. 環境整備（第13図）

戦国大名朝倉氏が領国支配の拠点とした一乗谷には、計画的に造られた都市の遺構が極めて良好に遺存しており、その中心部である「城戸ノ内」地区を中心にして、278ヘクタールという広大な地域が、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡として指定されている。この遺跡を保存すると共に『史跡公園』として整備し、歴史と生きた対話のできる場を提供することが、環境整備事業の目的である。このため、1962年以来、継続的に諸事業を進めている。そして平成３年から、検出した遺構に基づいて、当時の建物を立体復元し、合わせて豊富な出土遺物を通して生活空間の復元を目指した「町並立体復原事業」を国の史跡等活用特別事業の補助を受けて、４カ年にわたり実施した。今年度は、この町並立体復原事業を実施した地区内にあって、先に第77・78次(平成４年度)、第82・83次(平成５年度)として発掘調査を実施した屋敷跡を中心にして保存整備工事を実施した。これにより地区全体約25,000㎡の面的整備が終了した。

その概要は以下の通りである。

第77・78次調査区整備工事（第14図，PL13～14上）

この工事は、平成４年度に第77・78次調査区として発掘調査を実施した福井市城戸ノ内町字川合殿地係約 2,500㎡を対象とするものである。

整備工事の対象とした二つの調査区は、大規模な武家屋敷が南北方向の道路に沿って整然と並ぶこの地区の南半に位置している。北の屋敷が第77次調査区、南の屋敷が第78次調査区となる。共に、敷地の間口は約30ｍ、奥行きは山裾の未調査部を含め50ｍ程度と考えられる。屋敷は、道路に面し、正面となる東と隣接する南北の屋敷境の３方を、土塀の基礎部と推定される径0.3～0.6ｍ程度の自然石を２～３段積んだ小土塁で区画しており、道路に面する東の小土塁に門を各１カ所開いている。この道路に面した門及び土塀は町並立体復原事業の中で立体復元整備している。また、北に位置する第77次調査区の北に隣接する屋敷との境界の小土塁も第54次調査区整備工事として1987年(昭和62)に整備工事を実施済みである。今回の工事は、これらを除いた屋敷内の検出遺構の保存整備が主とした内容である。工事の設計方針は、調査区内は後世の削平を受け遺構の保存状況が良好でないことから、明確でまとまりのある遺構の表示に止め、屋敷全体の空間区分を示すことを主眼とすることとした。

実施した工事内容は、土塀基礎部や溝・石積施設等の石垣補修、石敷の蔵跡の露出展示、レミファルトによる建物跡の表示、掘立柱据付けによる塀(柵)の表示、井戸枠復元設置、

遺構面保護と屋敷内の空間表示を兼ねた山土・砂利・芝張等の舗装、樹木植栽、説明板設置等である。

第82次調査区整備工事（第15図，PL14下～15上）

この工事は、平成５年度に第82次調査区として発掘調査を実施した福井市城戸ノ内町字斎藤地係約 1,900㎡を対象とするものである。

整備工事の対象とした調査区は、町並立体復元地区の北端に位置しており、この南にあって1978年度に整備工事を実施した第24次調査区と一体となる屋敷の北半分となる。この屋敷は敷地間口約60ｍ、奥行き80～90ｍと大規模なものである。この地区に見られる大規模屋敷の通例通り山裾となる西面を除く３方を石垣を持つ土塁で区画する。屋敷の北境界となる土塁は、ここが地区の屋敷レベルが大きく変わる所であることから、幅約３ｍ、高さは西端部では北隣の屋敷面から３ｍ程を計る規模の大きなものとなっている。屋敷内の構成をみてみると、整備の終了している南半には門や庭園が存在する。これに対し、今回の整備対象とした北半には、蔵や鍛冶工房・竈等が存在する。こうしたことから、北半は、屋敷内にあって、日常生活を支える台所等や家人の空間と推定される。そこで、これらの遺構を表示し、あわせて屋敷の全体構成を示すことを整備方針とすることとした。

実施した工事内容は、屋敷全体の山土と砂利による保護舗装、屋敷の北境界となる土塁の裾石垣の補修と盛土整形・芝張による表示、掘立柱据付けによる工房建物の表示、レミファルトやソイルセメントを用いた蔵建物や竈の表示、井戸枠復元設置、樹木植栽、説明板設置等である。

第83次調査区整備工事（第16図，PL15下～17）

この工事は、平成５年度に第83次調査区として発掘調査を実施した福井市城戸ノ内町字川合殿地係約 1,200㎡を対象とするものである。

整備工事の対象とした調査区は、町並立体復元地区の南端に位置し、その南には管理棟や休憩所・便所・駐車場等が隣接する。この屋敷は主要な道路には直接面せず、引き込まれた小路の突き当たりに門を設けるものである。そして屋敷内は大きく二分され、建物跡も良好に残されていた。またこれに対応して門も２つ設けられている。そこでこれらの遺構を基本的には露出展示することを整備の基本方針とすることとした。なお、屋敷の奥、山裾で極めて良好に検出された土蔵跡については、大半が未公有の山林管理道を兼ねている園路下に位置するため今回の工事では表示することは見送り、説明板にその写真や位置を示すこととした。

実施した工事内容は、屋敷を区画する土塁石垣の補修、検出した建物礎石とレミファルトによる中心となる大規模な建物跡の表示、門跡の表示、山土・砂利を用いた全体の保護舗装、井戸枠復元設置、説明板設置等である。

町並立体復元地区外郭整備工事 (PL18)

この工事は、町並立体復元地区の北と南の端、福井市城戸ノ内町字斎藤及び川合殿地係約 500㎡を対象とするものである。

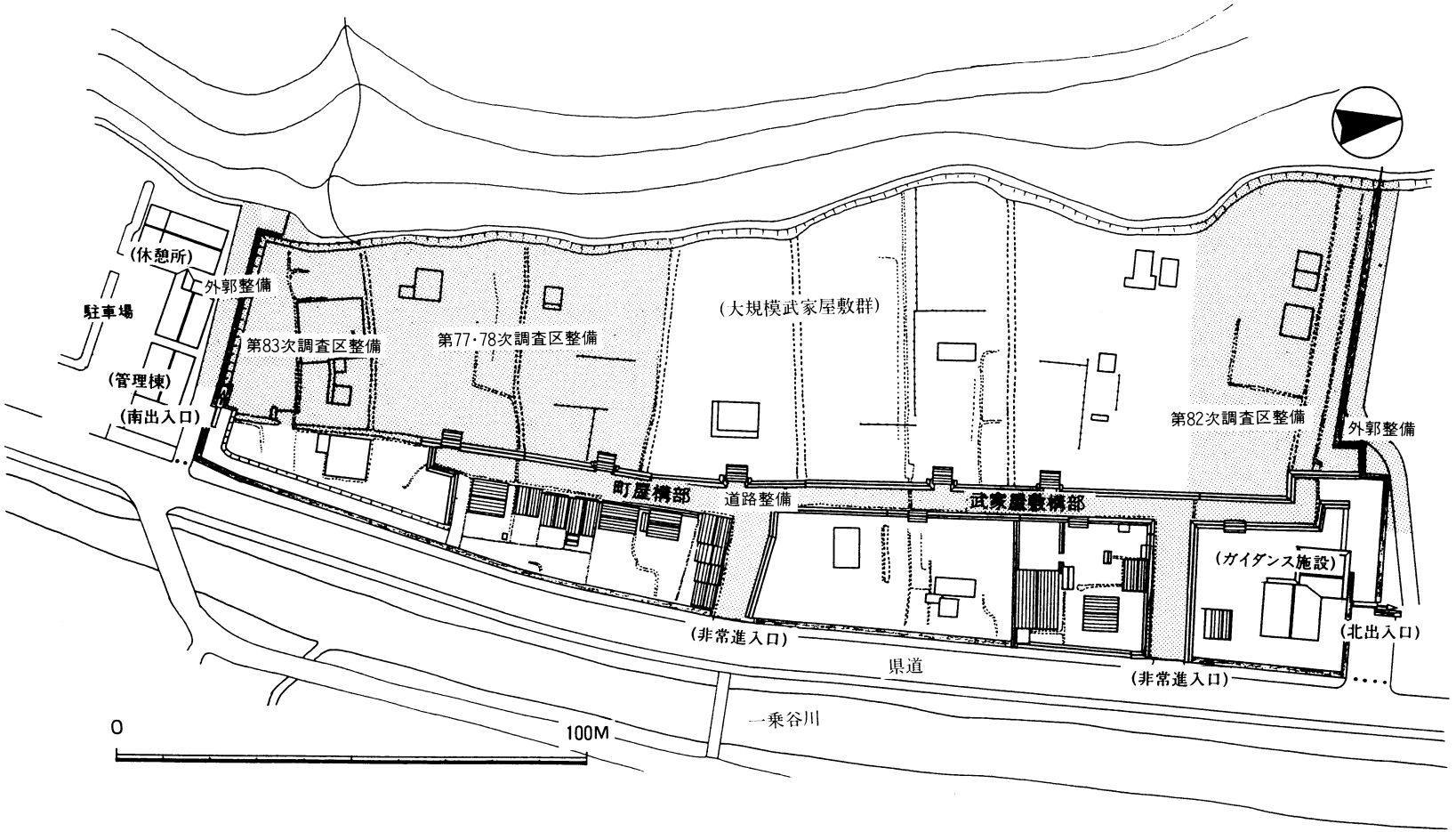
町並立体復元地区については、管理上の観点から、基本的には全体を囲い込む方針としており、先の特別事業において、南北の出入口周り及び東の県道沿は格子フェンスと植栽による外郭工事を実施している。今回の工事は、この地区内の整備工事が終了したことを受けて、残る南北の外郭を完成させることを主たる目的とした。

実施した工事内容は、既設のフェンス・植栽の延長、山裾園路部の管理用出入口設置、外郭に沿う園路作成等である。

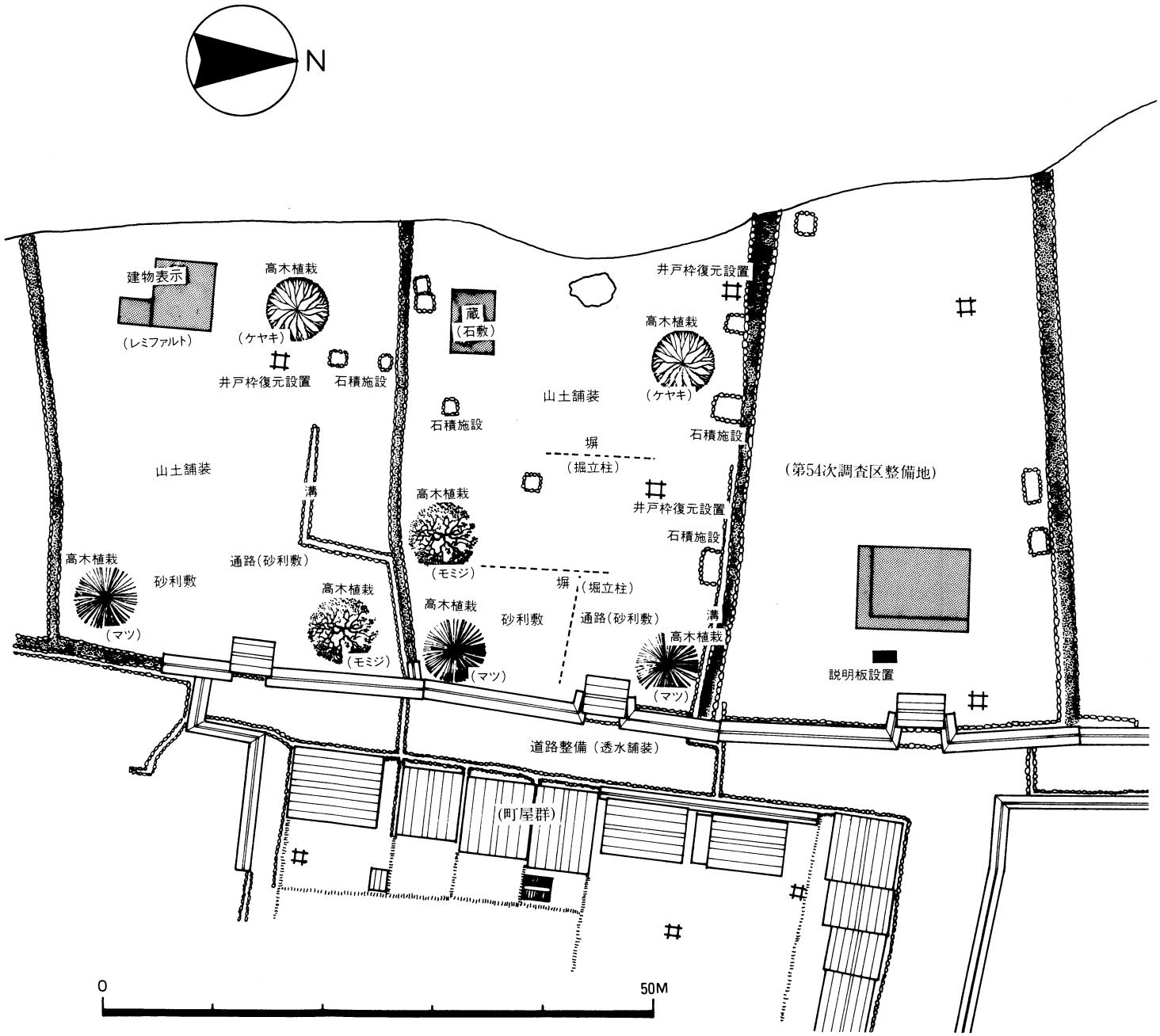
町並立体復元地区道路整備工事 (PL19～20)

この工事は、町並立体復元地区内の中心となる道路跡を舗装整備するもので、福井市城戸ノ内町字斎藤・平井・川合殿地係約 1,200㎡を対象とするものである。

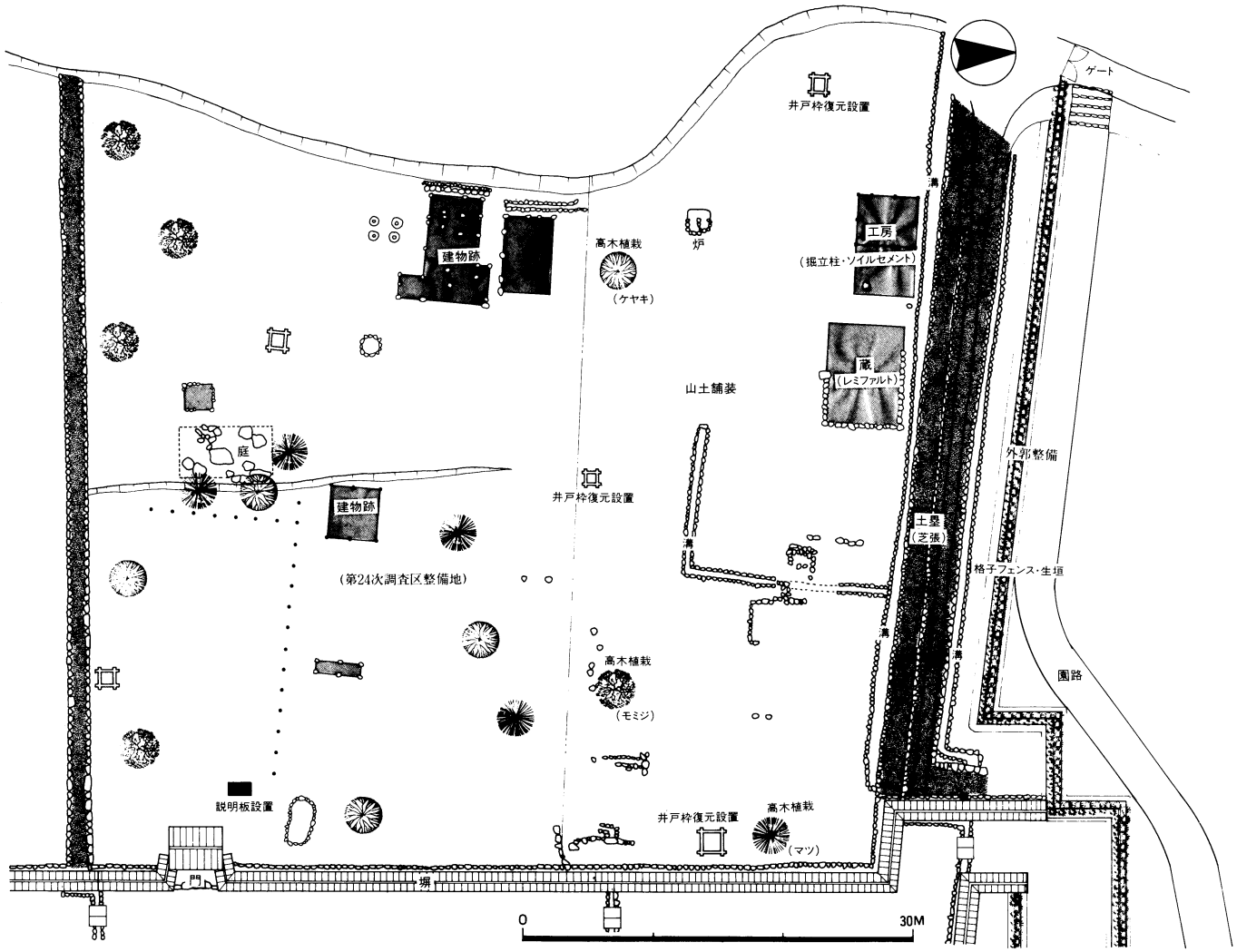
町並立体復元地区の主軸であり、かつ見学者のルートともなる道路跡は砂利を敷並べた仮舗装であったが、多くの見学者の歩行による砂利の移動も激しく、加えて車椅子の通行が困難であり、女性のハイヒールの歩行にも不評であった。こうしたことからこれを改善することを目指した。その材料・工法等について検討を加えた。まず第一にある程度の強度を有すること、第二に既存の砂利舗装の雰囲気に近く、大きな環境の変化を生じないこと、第三に雨天時にも水が溜ることなくすみやかに地下に水を浸透させ、かつ通行に快適なこと、等の条件から、従来の砂利を固める透水舗装とすることとした。また表面は洗い出し仕上げとし、より自然の砂利が表面に現われるよう心がけた。



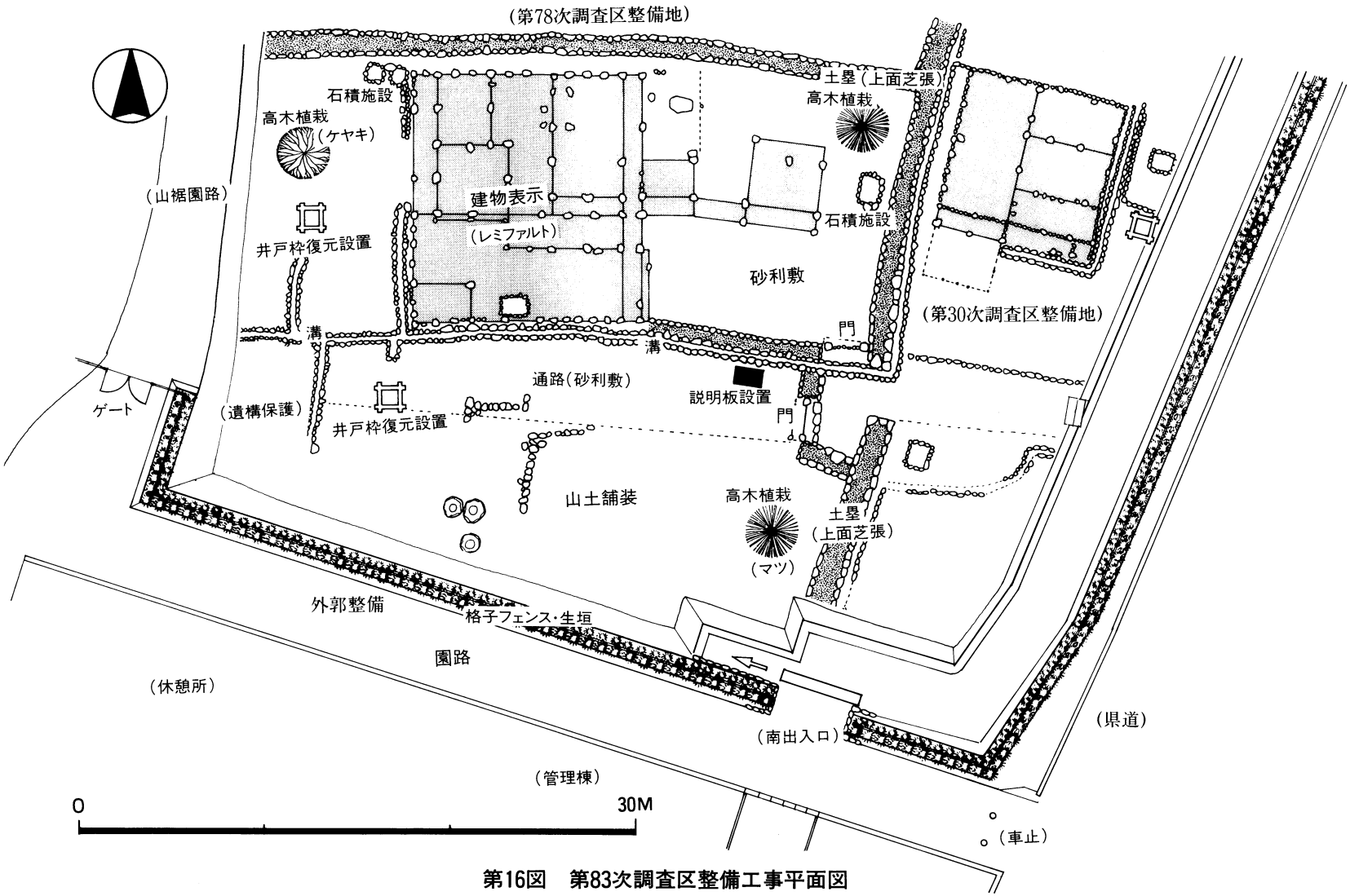
第13図　町並立体復元地区全体図



第14図　第77・78次調査区整備工事平面図



第15図　第82次調査区整備工事平面図



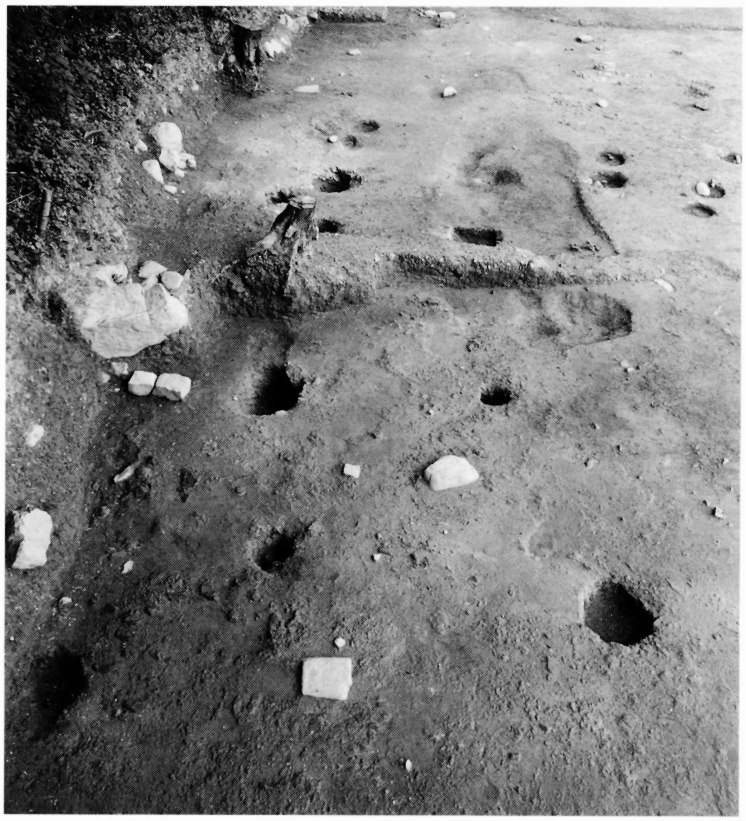
第16図　第83次調査区整備工事平面図

◀西山光照寺跡
山裾側（南から）

◀西山光照寺跡
山裾側（北から）

西山光照寺跡　墓地（南から）

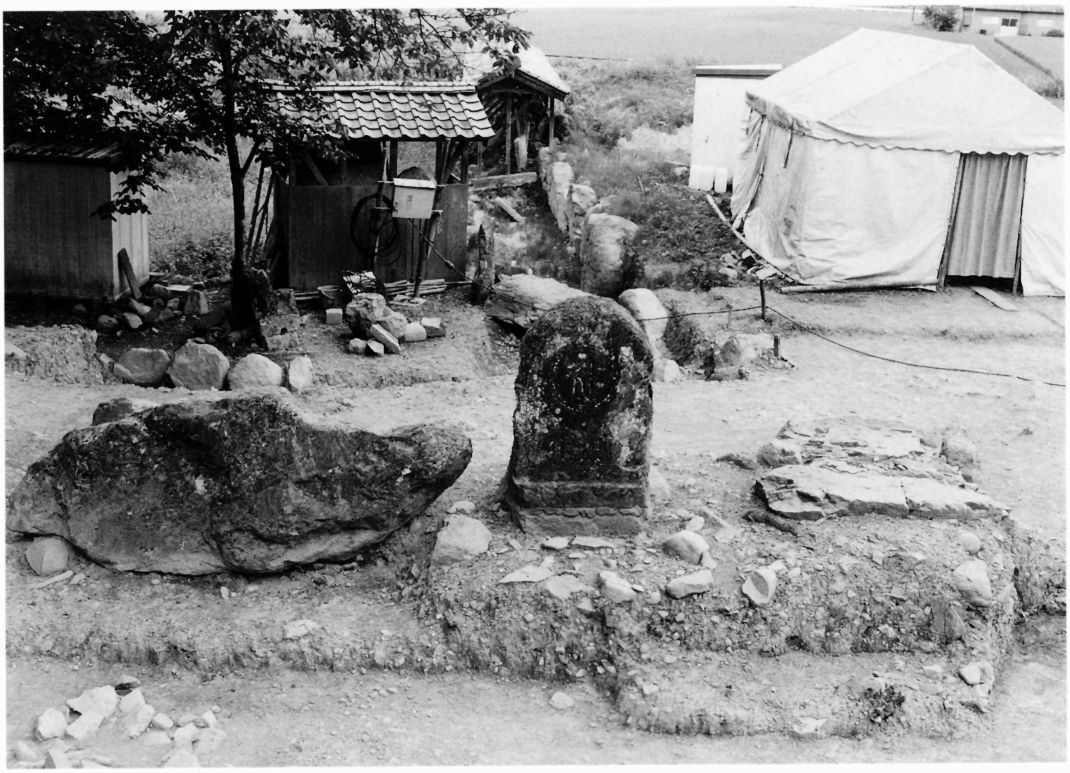
西山光照寺跡　墓地（東から）



◀西山光照寺跡
山裾側墓地

▼西山光照寺跡
SO4460

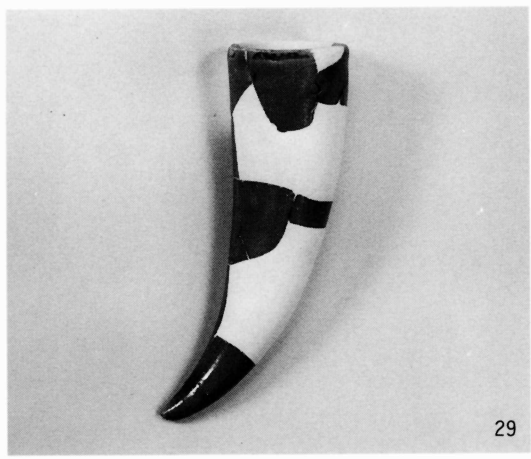
西山光照寺跡　東側全景



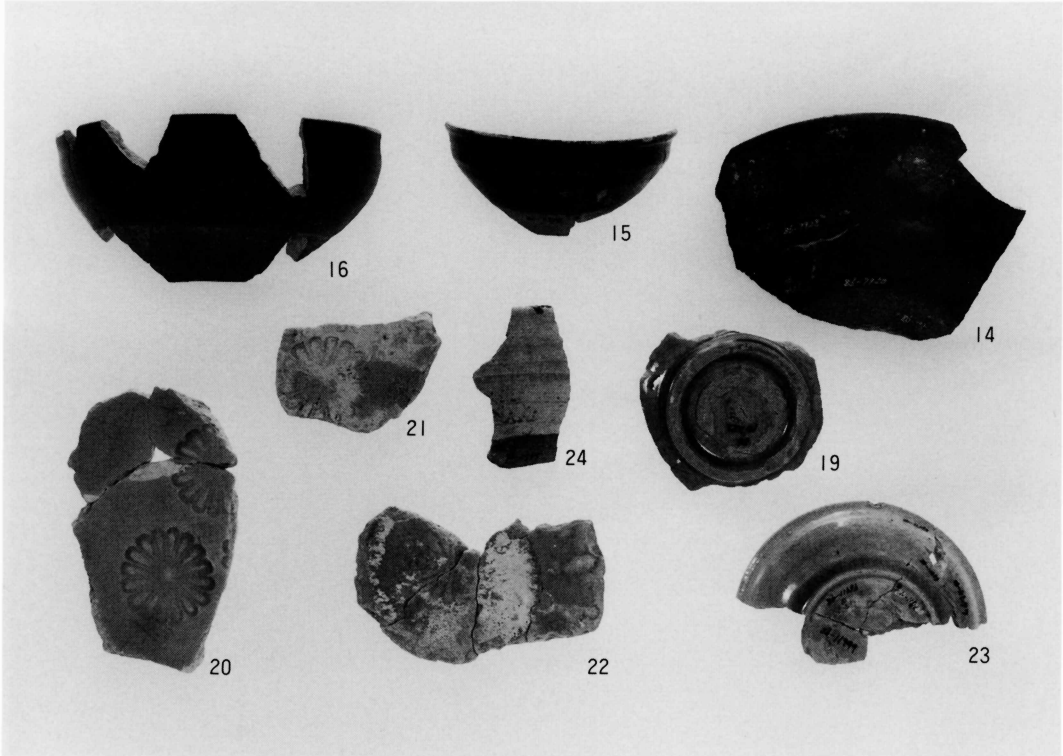
西山光照寺跡　石碑、蔵骨ピット

▲西山光照寺跡
門S1 4463

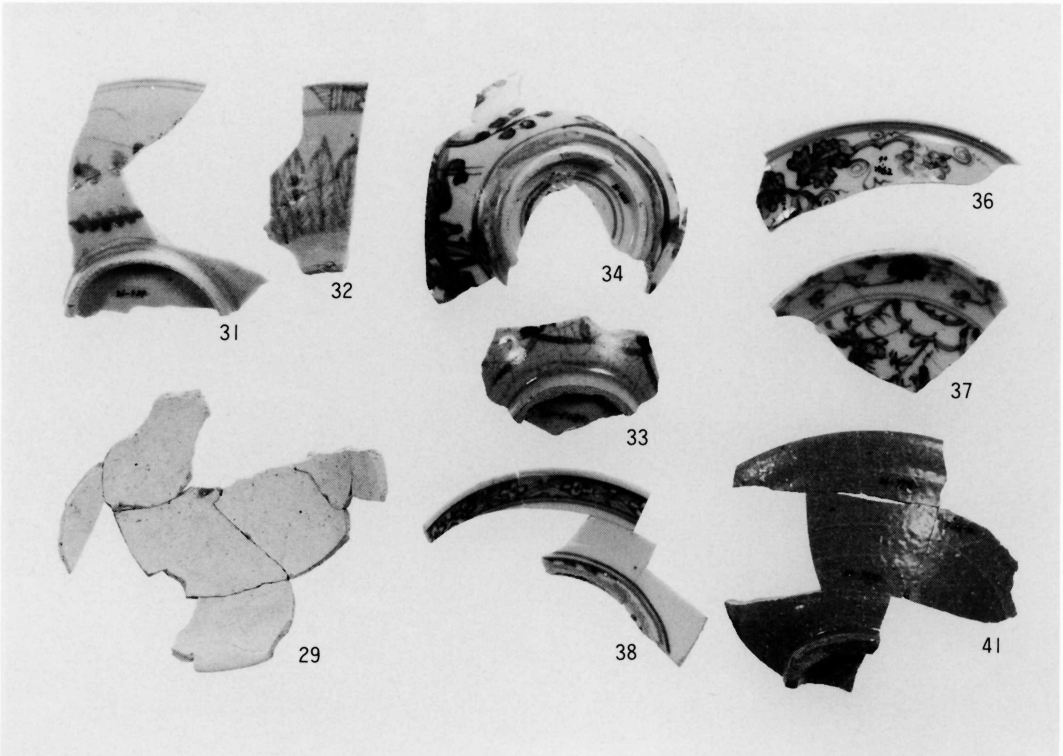
◀西山光照寺跡
タメマス SX4426（近世）



越前焼壺 1 土師質皿 7，9　**瀬戸・美農焼**鉄釉蓋19　灰釉香炉25　**青磁**水注26　角杯29
金属製品香炉44



瀬戸・美濃焼鉄釉碗14～16　灰釉碗19，皿20～23　香炉24



白磁皿29　　**染付**碗31～33　皿36～38　　**朝鮮製**碗41

第91次調査地区全景（南から）

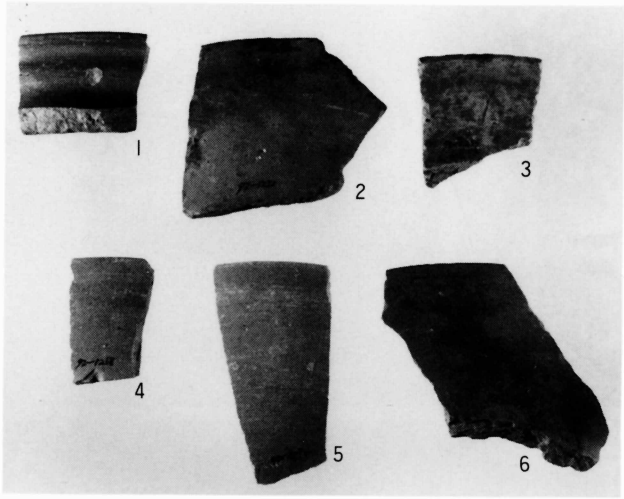
第93次調査地区全景

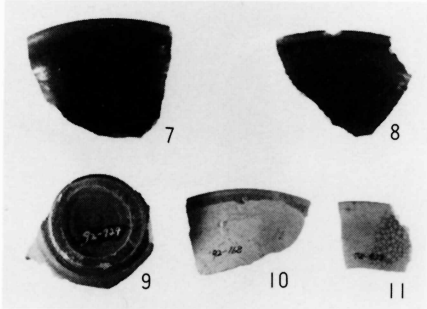
調査区全景（南から）

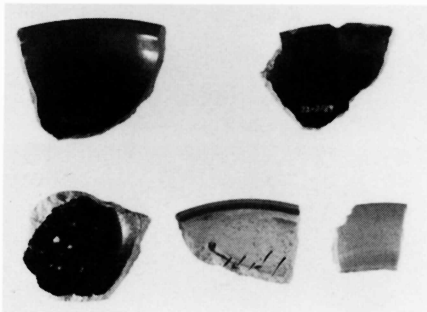
第1トレンチ全景

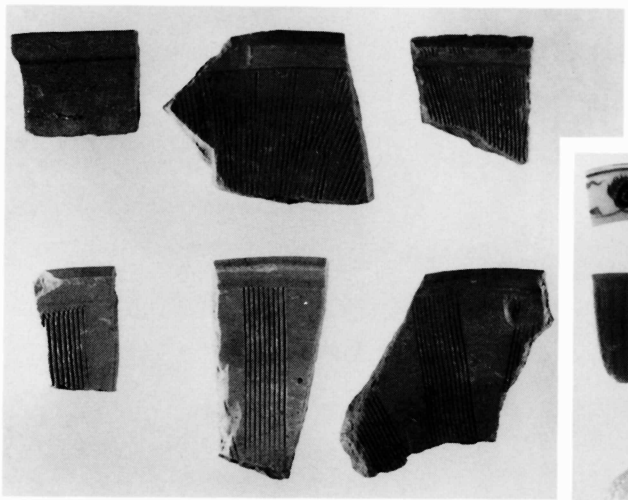
SF4480（手前）・SD4480（奥）

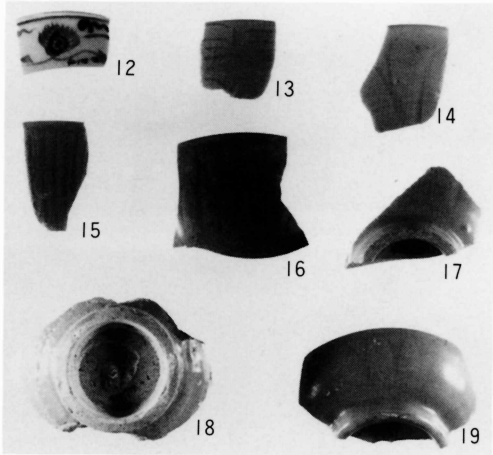
SX4483・4484・SD4481（手前より）



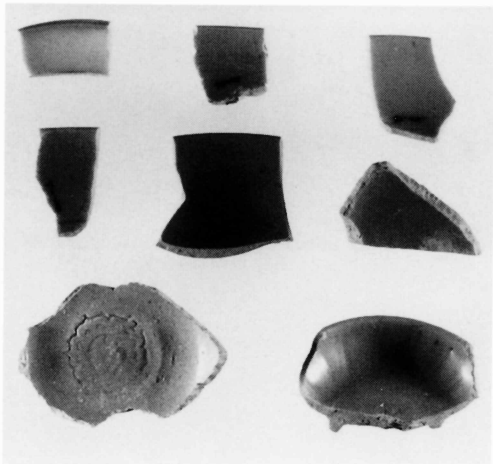




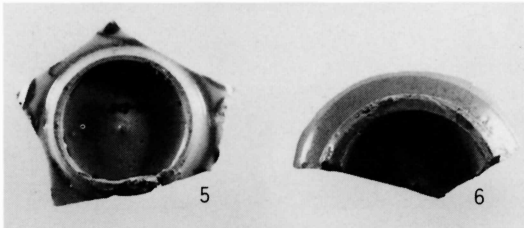


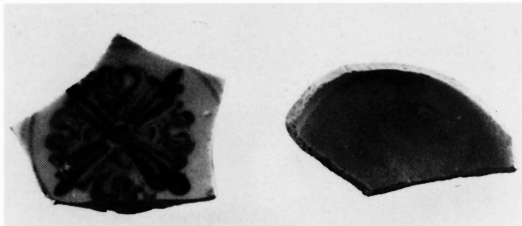


越前焼甕 1
越前焼擂鉢 2 ～ 6
瀬戸・美濃鉄釉碗 7 ～ 9　同御皿 10　同皿 11
中国製陶磁器染付皿 12　**青磁**碗 13～18　同皿 19



越前焼擂鉢 1　同鉢 2　同壺 3
土師質皿 4
中国製陶磁器染付皿 5　**青磁**碗 6





第77・78次調査区整備・全景（南西から）

同上（北から）

第77・78次調査区整備・掘立柱列（北西から）

第82次調査区整備・全景（東南から）

第82次調査区整備・建物跡（西から）

第83次調査区整備・全景（南東から）

第83次調査区整備・建物跡（西から）

同上（南西から）

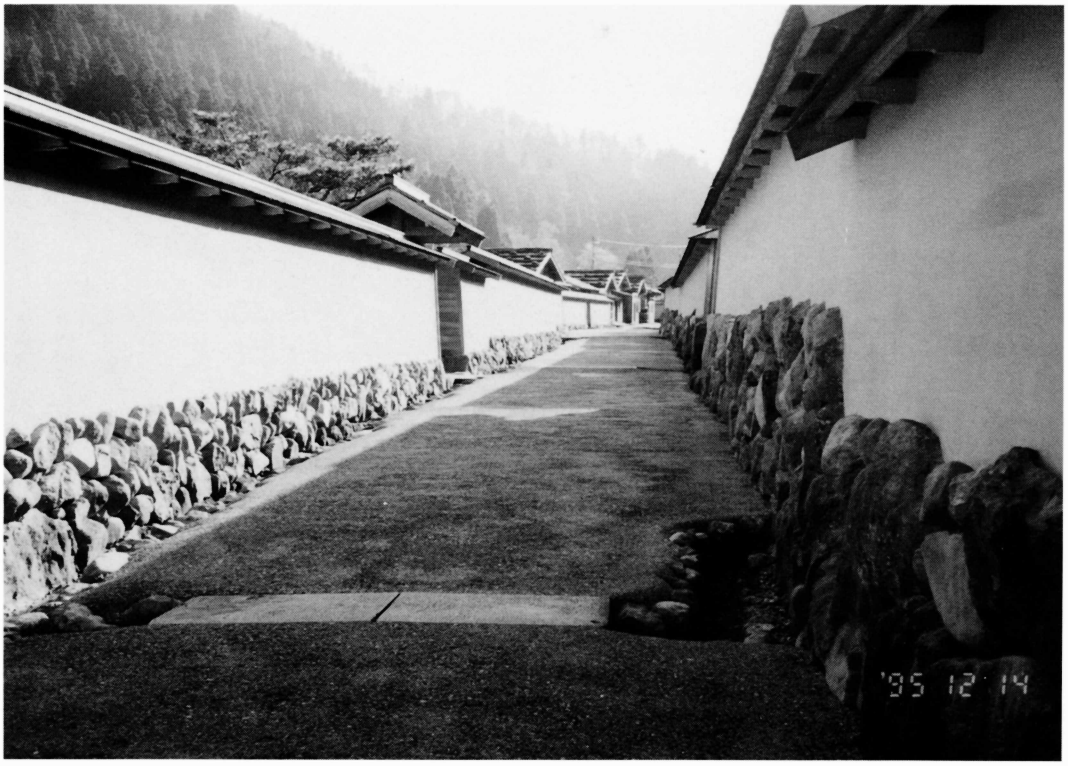
第83次調査区整備・門跡（南から）

同上・通路（西から）

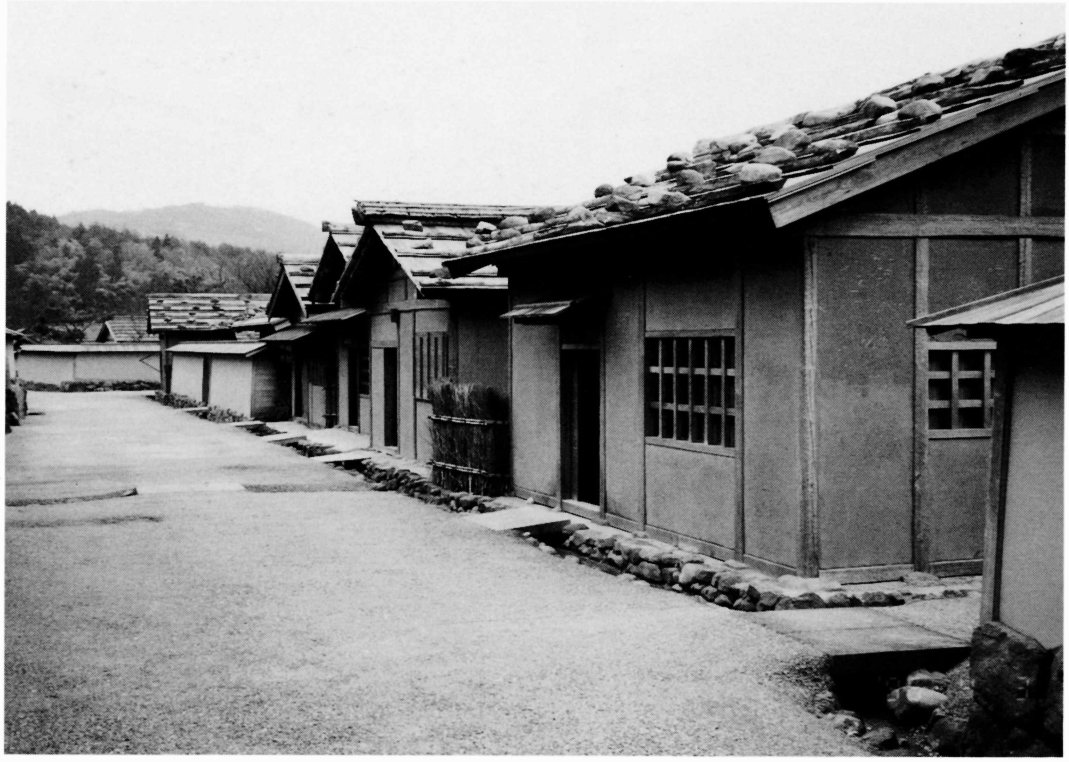
外郭整備・南部（東から）

同上・北部（西から）

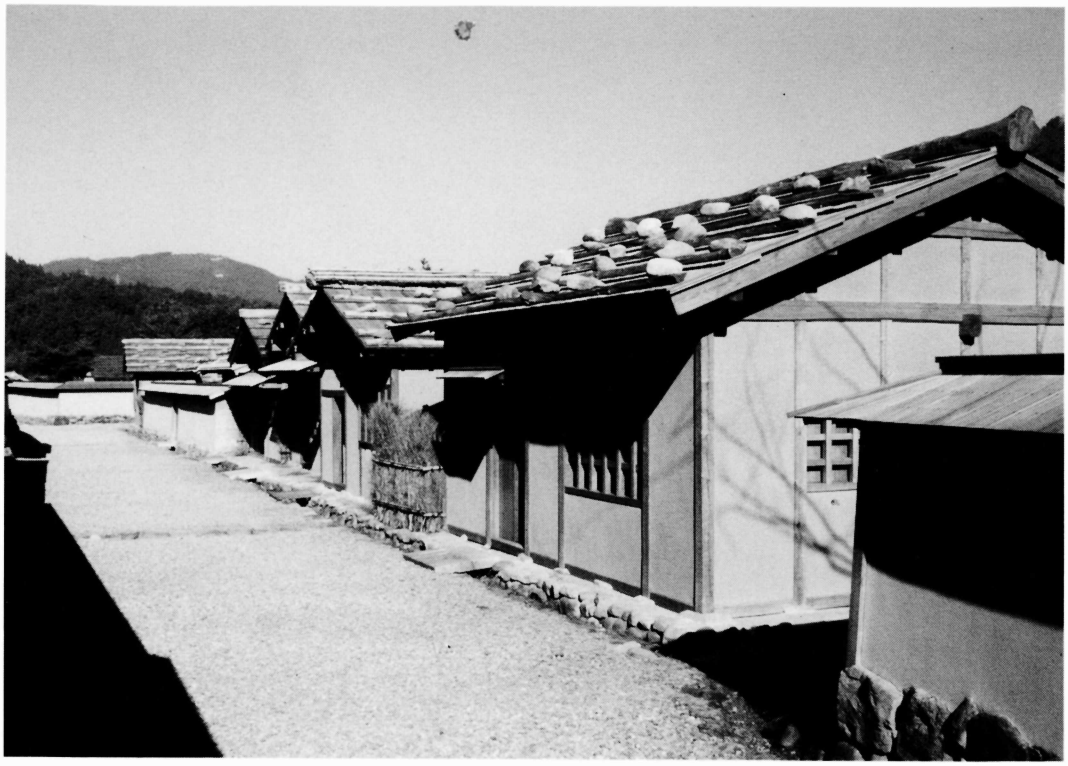
道路整備・南半部（北から）



同上・北半部（北から）



道路整備・南半部（南から）



同上（整備前）

ふ り が な	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書　　名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 1995
副 書 名	
シリーズ名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡
シリーズ番号	第27冊
編著者名	貴志真人　岩田 隆　吉岡泰英　水村伸行　宮永一美
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所　在　地	〒910-21　福井県福井市安波賀町4-10　　TEL 0776-41-2301
発行年月日	西暦　1996年3月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯 ° ′	東経 ° ′ ″	調査機関	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
一乗谷朝倉氏遺跡（いちじょうたに あさくらしいせき）	福井市安波賀中島町字西山光照寺	18210	史-31	36° 0′ 45″	136° 18′ 00″	90次 95.4.3～7.18	800m²	環境整備に伴う調査
	福井市東新町字御所安如寺			35° 59′ 30″	136 17′ 40″	92次 95.7.19～12.26	2,600m²	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　跡	主　な　遺　物	特　記　事　項
一乗谷朝倉氏遺跡（いちじょうたに あさくらしいせき）	城下町	戦国時代 15・16C	90次調査 墓地5　溝1 石段1　など	越前焼(2,100点) 土師質皿(2,200点) 鉄釉・灰釉(270点) 瓦質・備前・信楽等(100点) 青磁・白磁・染付(660点) 朝鮮製陶磁器(61点) 硯・砥・石盤・石臼(130点)	山裾の墓地については、前回以上ふえなかった。西山光照寺の入り口の階段が見つかったが、門跡は不明。
			92次調査 石組み溝　2条 石組み坑　28基 など	越前焼(460点) 土師質皿(1,600点) 鉄釉・灰釉(30点) 瓦質・備前・信楽等(10点) 青磁・白磁・染付(61点) 朝鮮製陶磁器(2点) 硯・砥・石盤・石臼(25点)	全体に削平されていて、遺構の残存状況はあまりよくない。南隅に石溝や石列、溜桝が見つかっただけである。

特別史跡
一乗谷朝倉氏遺跡
平成７年度発掘調査環境整備事業概要(26)

発行年月日　平成８年３月31日
編集・発行　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©
印　　刷　河和田屋印刷株式会社